

# 『江湖風月集略註』研究（十五）

禪研究所中世禪籍班

飯塚大展・佐藤俊晃・比留間健一・堀川貴司

はじめに

本稿は前稿に引き続き『江湖風月集略註』に関する校訂と注釈を行った成果である。読書会の参加者は、飯塚ほか、佐藤俊晃、比留間健一、堀川貴司の各氏である。読書会は、はじめに各自が担当者となり、頌一首ずつのレジメを作成し、それをもとに共同で校合の確認と内容理解に関する討議を行ってきた。担当は、以下の通りである。

- (183) 送日本僧（堀川） (184) 上大川（飯塚） (185) 靈照女（佐藤） (186) 魚籃観音（比留間） (187) 孤舟（堀川） (188) 人之江陵（飯塚） (189) 月江（佐藤） (190) 浄頭（比留間） (191) 天衣生縁（堀川） (192) 梅岩（飯塚） (193) 了庵（佐藤） (194) 人之沔水（比留間） (195) 松窓術士（堀川） (196) 賀南山侍者（飯塚）

【テキストについて】

(1) 底本と対校本

底本 ①京都大学附属図書館所蔵『江湖風月集略註』（以下「京大本『略註』」）

対校 ②飯塚架蔵増上寺二念庵旧蔵寛永九年版『江湖風月集略註』（以下「寛永本」）

(2) 参考史料

『略註』（林下妙心寺派）系統

③駒澤大学図書館所蔵『江湖風月集略註』大義写本（以下「大義写本」）

④飯塚架蔵寛永己酉（十年）版『江湖風月集略註鈔』（以下「略註鈔」）

『五山系統』

⑤龍門文庫所蔵『江湖風月集抄』（芳郷光隣・彭叔守仙抄、以下「龍門文庫本」）

⑥成實堂文庫所藏『襟帶集』

⑦駒澤大学図書館所藏『江湖風月集夾山鈔』（以下、『夾山鈔』）

〔洞門抄物系統〕

⑧蓬左文庫所藏『江湖風月集抄』（『蓬左文庫本』）

〔林下大徳寺系統〕

⑨足利学校遺跡図書館所藏『江湖風月集抄』（『足利学校本』）

〔妙心寺系統〕

⑩京都大学文学部図書館所藏『江湖風月集訓解添足』（無著道忠抄、以下『訓解添足』）

【翻刻凡例】

一、本史料翻刻に際しては、底本には、京都大学附属図書館所藏『江湖風月集略註』（以下「京大本略註」）を用いる。

一、底本の翻刻の体裁は、頌の本文を太字とし、注釈の本文は改行二字下げとする。本文の行間や欄外に書写された抄文も、匡郭内の注の後に「欄外注」として翻刻する。傍注に関しては、第一句から第四句を順次A B C Dとして、該当箇所を指摘した後、「傍注」として翻刻する。

一、底本と寛永本との校合を行なう。なお、校合に関する注は、「校異」として脚注の形で行う。

一、「略註鈔」は比較対照史料として、二段組で翻刻する。

一、翻刻に当たっては、異体字・略体字・別体字・俗字等は、現行の書体にて翻字する。省文等も同様である。また、明らかに誤写と思われる部分については、また脱字が明かな場合には、必要に応じて他のテキストを参考にし。

一、踊り字は、片仮名は「ゝ」、「ゞ」、「ゞ」、漢字は、「々」、「々々」を用い、二字以上の「く」も用いる。

一、合字の「ㄗ」「ㄘ」「ㄙ」「ㄥ」は、それぞれコト、シテ（シタ）、ヨリ、トキ、トモに置き換えて翻字する。

一、濁音・促音等の表記は、原文のままに翻刻し、敢えて統一ははからない。

一、句読点に関しては、読解を便ならしむるために、適宜これを補う。

0183 送日本僧

【京大本略註】

(四七) 処州石霜導和尚

(183) 送日本僧

抄云、此頌東福開山歸朝之時、送行頌軸有之。其軸今在普門寺。

A 眼力窮<sub>ル</sub> 辺脚力疲<sub>ル</sub>

B 大唐真箇没<sub>シ</sub>禪師<sub>一</sub>

C 昔日海上隨<sub>レ</sub>船<sub>ニ</sub>去<sub>リ</sub>

D 今日隨<sub>レ</sub>船<sub>ニ</sub>海上<sub>ニ</sub>歸<sub>ル</sub>

黄檗語云、還知大唐国裡没禪師麼<sub>\*</sub>。

〔欄外注〕

或抄云、普門軸中無此頌、并石霜導名如何。蓋聖一國師者、淳祐中出宋。

或抄云、此頌軸在普門未詳。

抄云、此頌第一句、行脚事了也。到此始知大唐無禪師之境界也。

第三四句、悟了同未悟之時節也。更無別事。

〔傍注〕

A 「眼力」行脚眼。

【出典】

未詳。

【校異】

\*日一年 \*語—之語 \*麼—麼抄云此頌第一句行脚事了也到此始知大唐無禪師之境界也第三四句悟了同未悟之時節也更無別事

【略註鈔】

（四七） 処州石霜ノ導和尚

（183） 送日本僧

東福開山ノ帰朝ノ時ノ頌ヂヤト注シタカ、サモアルカ。

A 眼力窮<sup>ル</sup>辺脚力疲<sup>ル</sup>

日本カラ唐土マデ知識ヲ尋テ、目デ見ユルホトハ来タガ、眼力窮ル辺ゾ。如<sup>レ</sup>此遙ル<sup>ク</sup>来タニ依テ、脚力モ疲レタゾ。如<sup>レ</sup>此来テ知識ニ参シテ悟<sup>リ</sup>テ見レハ、

B 大唐真箇没<sup>ナ</sup>禪師

ゾ。人ニ便テ得ル道理ニアラスゾ。

C 昔年海上随<sup>ヒ</sup>船<sup>ニ</sup>去<sup>リ</sup>

D 今日随<sup>ヒ</sup>船<sup>ニ</sup>海上<sup>ニ</sup>帰<sup>ル</sup>

真个ノ禪師無イコトヲ会スレハ、昔年モ只随<sup>レ</sup>船去<sup>リ</sup>、今日モ只随<sup>レ</sup>船帰<sup>タ</sup>迄テヨ。到<sup>リ</sup>得帰来<sup>テ</sup>無別事、芦山<sup>（5）</sup>、煙雨浙江ノ潮ト一意ゾ。悟<sup>リ</sup>了同未悟ノ境界ヂヤ。又只大唐真个没<sup>キ</sup>禪師ニ依テ、昔年モ随<sup>レ</sup>船去<sup>リ</sup>、今日モ随<sup>レ</sup>船帰<sup>タ</sup>迄テヨト東土<sup>（5）</sup>ヲ卑下シテシタニモナラウズ。サリナガラ徒ニ帰タコソ見事ヨ。

【注（183）】

（1） 処州石霜導和尚〓伝・法系不明。『首書』は圓悟—此庵景元—或庵師体—癡鈍智類—荆叟如珏—「石霜叢禪師」（無号とする）という次第を示す。叢という法諱とすれば、『貞和集』卷三・天文に石霜叢の「噴雪」という偈頌「嚇得飢腸不鼓雷、牙根冷地放春回、味中不帶大羊氣、元是漢家天上來」が収められており、可能性が高いか。なお、『襟帶集』は道吾円智の法嗣とするが、これは石霜慶諸という唐代の別人と混同したもの。処州は浙東路に属する州名（『方輿勝覽』卷九、石霜は潭州（湖南省長沙）にある山名、山中の崇勝寺に慶諸や楚円が住した）。

（2） 抄云此頌……在普門寺〓普門寺は円爾が東福寺建立以前に京都で開いた寺院普門院のことで、南北朝期には十刹に列せられ、院を寺に改めた。円爾が宋から将来した典籍を保管していたことで知られる。応仁の乱以降衰退、天正期以降廃寺となり、普門院の名称は開山塔である常楽庵の伽藍名に継承された。『略註』成立時にはまだ存在していたのであろう。「送行頌軸」は現存不明だが、円爾帰国の際、二十余人が送行頌を贈ったことや、そのうちの洪都道瑤の頌（七言絶句）が『聖一国師年譜』仁治二年（〓淳祐元年、

一二四一）条に記され、『隣交徵書』初編卷二には洪都の頌とともに、希叟紹曇の頌「送日本爾侍者」が収められている（『大日本史料』五篇十三、六八〇頁以下）ので（ただし同頌は『貞和集』卷六所収なので、そこから採録したとすると近世まで伝存したかどうか不明）、実在したものと思われる。しかし本作品がそのなかにあったかどうかは不明で、欄外注の「或抄」は無いと断言、『訓解添足』は「不審」とし、また竜門文庫本は「未考」として判断を保留するが、これは同じ東福寺の僧として否定に近い言い方ではないだろうか。

（3）黄檗語……：禪師麼『碧巖錄』卷二・第十一則本則に「拳、黄檗示衆云、汝等諸人、尽是唾酒糟漢、恁麼行脚、何処有今日、還知大唐国裏無禪師麼。時有僧出云、只如諸方匡徒領衆、又作麼生。檗云、不道無禪、只是無師」（大正藏四八・五一b）とあるのに基づく。師に頼ってはいつまでも悟りは来ない、と弟子を叱咤激励

00184上大川

# 【京大本略註】

(184) 上二大川

A客況寥々倚暮寒

B北高峰下鉄関

C草鞋不用多錢買

D眼底空々無別山

したものの。竜門文庫本は内容が豊富な『五灯会元』巻四を引く。

（4）抄云此頌……更無別事『A B句は、苦勞して宋に渡り、徧参遊方するという「行脚」を行ったからこそ初めて「大唐に禪師無し」という境地に達した、と述べ、C D句は真の悟りに達した今は、それ以前（入宋以前）と変わらない、とする。『略註鈔』は、もともと師に頼って悟りを得ようとすること自体誤りであったということを強調して、悟り同未悟の境地を示す伝蘇軾作の偈頌を引用する（前半は「廬山煙雨浙江潮、未到千般恨未消」。京大本だと、多くの師に参じたことによつて次第に禪境を深めて到達したとも取れるので、あるいは対立する解釈にもなるうか。

（5）又只……見事ヨ中国には真の禪師がいなかった、という文字面通りに解釈して、作者は中国を抑下し、何の影響も受けずに帰る（来る前から悟りに達していた）のは素晴らしい、と日本僧を托上する、という解釈を示す。

客況<sup>①</sup>、々々味也。詩人多言、官況、々々味也。是亦客味之意也。靈隱有北高峰<sup>②</sup>。大川時住靈隱也。鉄圀関者、大川之玄関、如鉄圀堅、人々不得透得也。或云<sup>④</sup>、石霜求靈隱掛搭、難入頭如鉄門関也。三四句、言、大川和尚外、別無善知識也。抄云、客況者、客情也。

〔欄外注〕

此時大川住靈隱、法幢昌也。

勝覽曰、北高峰、在靈隱山後。

〔傍注〕

A句 客裏寥々、殊ニ暮寒時分

B句 「下」或作上。「鉄圀関」大川門庭峭峻、難透得也。

【出典】

未詳。

【校異】

\*—大川住靈隱法道大振

【略註鈔】

(184) 上大川

石霜ノ学者ノトキ、大川ニ参暇ヲ求ルナリ。又、学者ニ代ルカ。

A 客況寥々倚暮寒<sup>ニ</sup>

客裡ノナリゾ。況ノ字ハ、何ニモ付ル字ゾ。倚暮寒トハ、

B 北高峰下鉄圀関

北高峰ハ、靈隱ゾ。大川時ニ住<sup>スル</sup>靈隱ニゾ。大川ノ処ニハ、鉄圀関ガアルニ依テ、ヨリツカレヌゾ。

C 草鞋不用多錢<sup>ニ</sup>買<sup>コト</sup>

小寒<sup>サム</sup>イナリゾ。ホトニ、大川ノ処ニ掛搭シテ居タイ、ト云心ゾ。

多<sup>(9)</sup>錢ヲ費シテ草鞋ヲ買テ、ヨソヘ行クコトハスマジイナリ。

## D 眼底空々無<sup>レ</sup>別山

石霜<sup>10)</sup>ノ眼底ヨリ見レハ、諸方ニ善知識ハ無イソト、諸方ヲ空ジタソ、ホトニ、別山ヘ行キコトハイヤヂヤ、ホトニ、是非掛搭ヲ御許<sup>ヲユル</sup>シアレソト也。

## 【注(184)】

(1) 客況々者味也……亦客味之意也。A句「客況」に関する注。「客況」の「況」は、「味」と同義であり、詩人が好んで使う「官況」も「官味」の意である、の意。この語「客況」も亦「客味」(旅人のありよう、その思い)の意である。「龍門文庫本」には、「去声漾韻、況者、発語之辭、況トハ、別也。況ハ、譬擬也。善也、矧也。亦作況云々。然義異者分押、云々。毛晃」とあり、「増修互注礼部韻略」卷四「況」「覓」を引用し、「況」と「況」と、字義が異なることを指摘する。「客味」の用例としては、『石門文字禪』卷十「送隆上人」詩に、「老去漸知為客味、秋來長作送人詩」とある。『訓解添足』は、「官況」の用例として、齊己『白蓮集』「南歸舟中二首」(その二) 起聯の句「長江春氣寒、客況棹聲閑」を用例としてあげ、また、「韻府二、官況、情況、佳況」とあり、「韻府群玉」の用例をあげる。後文に、「抄云、客況者、客情也」とあり、別の抄に、客情(旅人の心情)の意とする事を指摘する。『夾山鈔』は『古今韻會舉要』「韻府群玉」を引用して、「(上略)官況ハ猶客情也。按スルニ韻會、去漾<sup>レ</sup>韻ニ、覓ノ母ニ、況ハ賜也。又、臨訪<sup>ヲ</sup>日來況、通<sup>シテ</sup>作<sup>ル</sup>況ニ。又、韻府ノ覓ノ下ニ、臨覓ノ注ニ、漢ノ灌夫謂<sup>テ</sup>田蚡ニ曰、將軍乃肯<sup>テ</sup>幸<sup>シテ</sup>臨<sup>ニ</sup>況<sup>スト</sup>魏其侯ニ」と注する。首書も同様に注する。

(2) 靈隱有北高峰大川時住靈隱也。欄外注に「勝覽曰、北高峰、在靈隱山後」とあり、『方輿勝覽』によれば、靈隱山に「北高峰」があると指摘する。しかし、現行の『方輿勝覽』にこの記事は見えない

い。但し、『大清一統志』卷二六には、「北高峯(在錢塘県西、即靈隱山最高処、石磴數百級、曲折三十六灣、奇勝与南高峯相埒(下略)」と見える。また、『松源録』卷二「塔銘」に、「跣趺而寂。実嘉定二年八月四日也。得年七十有一、坐夏四十。奉全身塔於北高峰之原」(統藏一二・三二六a)とあり、嘉泰二年(一二〇二)八月、松源崇岳は靈隱寺において、世寿七十一歳で遷化し、北高峰に塔せられている。大川普濟(一一七九―一二五三)は、淳祐十一年(一二五一)春、靈隱寺に晋住し、宝祐元年(一二五三)一月に世寿七十五歳で遷化している。仮に石霜がこの頌を大川に送ったとすれば、この時期の事となる。欄外注に「此時大川住靈隱、法幢昌也」とあり、靈隱寺に住したこの時期、大川の法が盛んに行われていた事を指摘する。

(3) 鉄閉関者大川……人々不透得也。『鉄閉山』は須弥山を囲む九山八海の一つで、最も外側の鉄でできた山をいう。『鉄閉関』は、ここでは、大川の玄奥の関門が、高く聳え、鉄のごとく堅牢にして、容易に人を寄せ付けない事を言う。『訓解添足』に「●一二句、蓋導公求掛搭不<sub>レ</sub>許、乃上<sub>二</sub>此偈<sub>一</sub>也。今我為<sub>二</sub>客身<sub>一</sub>、在<sub>二</sub>旦過<sub>一</sub>望<sub>二</sub>掛搭<sub>一</sub>、寥寥倚<sub>二</sub>暮寒<sub>一</sub>而已。靈隱、禪固閑閑、不<sub>レ</sub>許掛搭、如<sub>二</sub>鉄閉山不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>入頭<sub>一</sub>也。統翠雖<sub>レ</sub>笑<sub>二</sub>此<sub>一</sub>、説<sub>二</sub>統翠<sub>一</sub>一句、客作<sub>二</sub>漢、暖処寒処<sub>一</sub>商量猶可<sub>レ</sub>笑<sub>二</sub>也<sub>一</sub>」とあり、統翠(江西龍派)が、上記の解釈を否定しているが、無著道忠は統翠の解釈を一笑に付している。『靈隱大川禪師行狀』に、「師孤硬趣操、嚴冷面目、其当機妙転。珠

不容触、臨事定見、山猶可拔。一以身徇道、而世相逆順、拳不足以回撓。其為己為人、皆推此而行之。學者苦其峻厲、難於近傍。久則眷恋、而不忍去。其提唱的切、省徑如蠱家之益、飲者必死。如良医之劑、咀者必活」(統藏一二・七七二b)とある。傍注が「大川門庭峭峻、難透得也」と指摘するように、大川の家風は峭峻嚴格なものであり、その関門を透得しがたいものであった事をいう。『鉄閉関』の用例としては、『嘉泰普燈錄』卷十三「無示分謀章」に「上堂。文殊智、普賢行、多年曆日。德山棒、臨濟喝、乱世英雄。汝等諸人、穿僧堂、入佛殿、還知嶮過鉄閉関麼。忽然踏著釈迦頂額、磕著聖僧額頭、不免一場禍事」(統藏一三七・三七三b)とある。

(4) 或云石霜求……如鉄門関也。注(3)が、大川の教えの深奥に達しがたいことを言うのに対して、別の解釈として、当時靈隱寺には大川が住持しており、行脚僧であった石霜は掛搭(入門)を求めたが、門戸は鉄の関門のように閉ざされて許されなかった事を言うとする。

(5) 第三四句……別無善知識也。C D句は、石霜にとって、大川和尚以外に、参すべき善知識は居ない事を言う。

(6) 石霜ノ學者……學者二代ルカ。『参暇』は、「参飯」とも。禅林において、所用のために外出していた僧が僧堂に帰ることをいう。ここでは、石霜が行脚の修行僧であったとき、大川に掛搭(僧堂への入門)を求める為に、提示した頌とする。また、当時の参學の徒に代わって、作った偈かとも言う。



(7) 客裡ノナリゾ……居タイト云心ゾ客僧(行脚僧)のたたままい(心情)を頌する。「況」は、語助で、どのような文字にもつく。

注(1) 参照。「倚暮寒」は、秋の夕暮れ、寒々しい光の中にたえずむ行脚僧(私)の姿。禪僧は、すべからく一所不住、しかし旅人(行脚僧)の心情は、参禅すべき善知識も定まらないままに、自分ながら頼りなくわびしい思いに沈んでいる。だから、大川和尚に入門して修行したいと切に思う、の意。

(8) 北高峰ハ靈隱……ヨリツカレスゾ「北高峰」並びに大川の靈隠寺晋住は、注(2) 参照。和尚の居る靈隠寺に参じたいと思いますが、そこは鉄の門で閉ざされており、寄り付く事も出来ません、の意。

(9) 多錢ヲ費シテ……スマジイナリ私としては。大金を費して、草鞋を買う必要など微塵もない。私はこれ以上歴参するつもりは全

0185 靈照女

【京大本略註】

(四十八) 天台中叟ノ質侍者

(185) 靈照女

龐居士<sup>ムスメ</sup>女也。名靈照、常隨。製<sup>ニ</sup>竹漉籬<sup>ニ</sup>令<sup>レ</sup>羈之以供朝夕。將入滅、令女靈照出視<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>早晚<sup>一</sup>、及<sup>ニ</sup>午<sup>ニ</sup>以報<sup>一</sup>。女邊報曰、日中矣。而有蝕也。居士出戸視次、靈照即登父座、合掌而坐亡。居士咲曰、我女鋒捷矣。於是更延<sup>ニ</sup>七日<sup>一</sup>化。

A 家貧<sup>シテ</sup>固<sup>ニ</sup>是<sup>コト</sup>計<sup>ハ</sup>無方<sup>ハ</sup>

B 肯<sup>ヘテ</sup>怪<sup>マシヤ</sup>爺々<sup>ニ</sup>少<sup>カク</sup>較量<sup>コト</sup>

くない。私は大川和尚、あなたに参じたいという、切なる求道の意。

(10) 石霜ノ眼ヨリ……許シアレント也私(石霜)の目には、諸方で法道を立てる善知識など、取るに足らないと抑下した意とする。大川あなたしかいない、もはや外には行きたくない、私はどうしてもあなたの会下に参じたい、どうか許可して下さい、の意。C D句に關して、「龍門文庫本」は、「言ハ、靈隱ニ掛搭ヲユルシタマヘ。此去テ、草鞋錢ヲ費テ、他処エユカウトハラモワス、ナセニナレハ、眼底<sup>一</sup>、此ノ靈隱ノ外、別ニ名山ハ無也。大川ヲ托上シテ云也」とあり、大川を托上する意に解する。『訓解添足』には、「○三四ノ句、我決<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>去<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>処<sup>ヲ</sup>、故不<sup>レ</sup>用<sup>テ</sup>多錢買<sup>ニ</sup>草鞋<sup>一</sup>向<sup>コト</sup>他方<sup>ニ</sup>、何故<sup>一</sup>、我眼底空<sup>ス</sup>諸方、無<sup>ニ</sup>亦師家<sup>一</sup>在<sup>ニ</sup>別山<sup>一</sup>。但所<sup>レ</sup>貴、在<sup>ニ</sup>大川和尚<sup>一</sup>而已」とあり、同様に解する。注(5) 参照。

C 河裡<sup>ニ</sup>失<sup>シテ</sup>錢<sup>ヲ</sup>河裡<sup>ニ</sup>攄<sup>ス</sup>  
D 策<sup>ニ</sup>離<sup>レ</sup>贏<sup>エ</sup>得<sup>ル</sup>柄<sup>ノ</sup>添<sup>キ</sup>長<sup>キ</sup>

爺々、父也。少較量者、言宮<sup>イ</sup>家<sup>ニ</sup>産計<sup>ニ</sup>疎也。河裡<sup>一</sup>者、居士以<sup>ニ</sup>珍宝錢財等<sup>一</sup>、悉捨<sup>ニ</sup>洞庭湖<sup>一</sup>。人相語云、何不<sup>ル</sup>施<sup>レ</sup>人。答曰、吾讐何施<sup>ヤ</sup>人<sup>ニ</sup>乎。雲門、僧問如何是西來意。門云、河裡失<sup>レ</sup>錢<sup>ヲ</sup>河裡<sup>ニ</sup>攄<sup>ス</sup>。伝灯十八。

〔欄外注〕

襄州居士龐蘊者、衡州陽果人也。字道玄。元和中北遊襄漢、随处而居、郭西小舍、一女名靈照云々。居士有偈云、心如境亦如、無笑亦無虛、有亦不管、無亦不拘、不是聖賢、了事凡夫。

州牧于公問疾。士謂曰、但願空諸有、慎勿笑諸所無、好住世間、皆如影響。言訖枕公膝而化。

或抄云、少較量者、無世路計較也。言居士以珍宝錢財、悉捨湖中、故乏朝夕、今又鬻漉籬、以給。

第三句、用雲門語、以為竹漉籬機緣耳。

〔傍注〕

A 了事凡夫貌。

〔出典〕

未詳。

〔校異〕

\*女遽報―ナシ      \*咲―笑      \*少較―較      \*河裡――河裡失錢河裡攄

〔略註鈔〕

（四十八）天台巾叟質和尚

（185）靈照女

龐居士ノ女メソ。

A 家へ貧<sup>ニシテ</sup>固<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>計<sup>ハカリ</sup>無方<sup>コト</sup>

トット貧窮スレハ何ニトモセフスル方便モナイ物ゾ。

B 肯<sup>テ</sup>怪<sup>カ</sup>爺<sup>ニヤ</sup>少<sup>タカ</sup>較<sup>コト</sup>量<sup>ヲ</sup>

肯<sup>テ</sup>怪<sup>カ</sup>ムトヨムトキハ、何ニトシタレハ、是<sup>レ</sup>ホトニ父ハ貧窮セラレタソト不審スルナリ。肯<sup>テ</sup>怪<sup>カ</sup>マンヤト云トキハ、父ノ貧窮セラレタ怪ムニ及バヌソトナリ。此義可也。靈照<sup>（14）</sup>二代<sup>（14）</sup>テ云ナリ。較量ハ家産ヲ營ナムノ義也。貧乏スレバ何ニトモセフヤウカ無イ物ゾ。

C 河<sup>カ</sup>裡<sup>ニ</sup>失<sup>シ</sup>錢<sup>ヲ</sup>河<sup>カ</sup>裡<sup>ニ</sup>撻<sup>ツ</sup>

D 籠<sup>カ</sup>籠<sup>カ</sup>得<sup>タリ</sup>柄<sup>ヲ</sup>添<sup>フ</sup>長<sup>ヲ</sup>

籠<sup>（15）</sup>居士ハ財宝ヲ西湖ニ沈メタホトニ、河裡<sup>ニ</sup>失<sup>レ</sup>錢<sup>ヲ</sup>タコトソ。アルカ、又籠<sup>カ</sup>籠<sup>カ</sup>ヲ造テ売タホトニ、河裡<sup>ニ</sup>撻<sup>ツ</sup>タコトゾ。居士ハ手ヲ以テ籠<sup>カ</sup>籠<sup>カ</sup>ヲ造タホトニ、河裡<sup>ノ</sup>錢ヲ手ヲ以テ取タコトゾ。靈照ハ籠<sup>カ</sup>籠<sup>カ</sup>ヲ売タホトニ、河裡<sup>ノ</sup>錢ヲ柄ノ長イザルニテ救テ取タコトゾ、ホトニ、居士ニハ贏チ得タナリト云ハ、父ヨリ機鋒ガマシテ先ニ死シタヲ云ゾ。又財宝ヲ河ニ沈メテ籠<sup>カ</sup>籠<sup>カ</sup>ヲ作テ売タカ、前ノ富貴ニハ増シタト云義モアルソ。又財宝ヲ海ニ沈メテ西江吸尽ノ処テ、尽<sup>キ</sup>ヌ宝ヲ撻<sup>ツ</sup>シタホトニ、贏<sup>テ</sup>得<sup>タ</sup>ト云義モアリ。アレトモ、是<sup>レ</sup>ハ龐居士カコト斗リテ、靈照女ト云題カ聞ヘヌゾ。総<sup>（18）</sup>別<sup>（18）</sup>アマリキツカトハ聞ヘヌソ。有識ノ人ニ問ヘ。

【注（185）】

- （1）天台<sup>（1）</sup>中叟<sup>（1）</sup>質侍者<sup>（1）</sup>ハ伝及び嗣法未詳。『略註鈔』は侍者を和尚とする。『夾山抄』も和尚に作り「和尚、別本作侍者」と注する。五山版は「中叟」とし、その書き入れ注に「天台<sup>（1）</sup>中叟<sup>（1）</sup>質侍者<sup>（1）</sup>」と見える。
- （2）龐居士女……延七日化<sup>（2）</sup>ハ龐居士の娘、靈照女を注する。竹ザルを売って日々の生計にしていた話。また龐居士が臨終の際、太陽の高さを靈照に問うと、靈照は「すでに陽は中天にあり日蝕になっている」と答える、居士はそれを見るために戸口に出る、すると靈照は父の座に上り合掌したまま坐亡した、それを居士は笑って「わが娘は鋒捷<sup>（3）</sup>い」と言い、自分の臨終を七日延ばすことにしたという話。前者は『龐居士語錄』卷上に「元和中、居士北遊襄漢、随处而居。有女靈照、常鬻竹漣簾、以供朝夕。」（統藏一二〇・三一a）と見え、後者は同書に「居士將入滅、謂靈照曰、視日早晚、及午以報。照遽報、日已中矣、而有蝕也。士出戸觀光次、照即登父座、合掌坐<sup>（4）</sup>。士笑曰、我女鋒捷矣。于是更延七日」（統藏一二〇・三一b）と見える。京大本はこれを編集したものか。京大本に比較的近いものに『仏祖統記』卷四十一（大正藏四十九・三八一a）がある。ほかに『景德伝灯録』卷八「襄州居士龐蘊」章（大正藏五一・二六三a）、『仏祖歴代通載』卷十五「居士龐蘊」章（大正藏四九・六一七a）等がある。同文の典拠は未詳。
- （3）爺々父也<sup>（3）</sup>ここでは爺々は父親のこと。禪語では師に対する通俗的な言い方として爺（おやじ）を用いる場合がある。

（4）少量者……疎也。ここでは較量を、生計を維持する能力と解している。もと富豪として知られた龐居士がその家財をすべて捨ててしまったことを踏まえたもの。

（5）河裡……何施人乎。C句は、龐居士がかつて家財をすべて河（湖・海）へ捨てたことを踏まえていると解しその典拠を示すもの。この話について入矢義高は『禪の語録7 龐居士語録』の解説において「彼が全財産を舟に積んで、これを河（または海）に沈めたというエピソードである。『禪宗頌古聯珠通集』巻十四・「指月録」・『釈氏稽古録』巻三と本書（『禪の語録7』）序などは湘水に沈めた」といい、『大光明藏』巻中では西江に沈めたといい、『釈氏通鑑』巻九・「唐詩紀事」巻四十九では洞庭湖に沈めたといい、しかも後代の資料になるほど、その沈めた資産の質と量が増大する」と指摘する。龐居士財宝投棄の伝は諸資料に見えるが京大本と同文のものは不明。とくに財宝は自分にとって「讐」であるという表現は何によるものか未詳である。ただし道元の『正法眼藏随聞記』巻四に「彼の人參禪の初め、家の財宝を以ちて出でて海にしずめんとす。人これを諫めて云く、人にも与へ、仏事にも用ふべし。他に対へて云く、我れ已にあたりと思ふて是れをすつ、焉んぞ人に与ふべき。財は身心を愁しむるあたなり」と。遂に海に入れたと見え、京大本と同じ典拠によるものかもしれない。

（6）雲門……伝灯十八。C句の典拠を示す。「景德伝灯録」巻十九（京大本が巻十八とするのは誤り）「韶州雲門山文偃禪師」章に「問、

如何是西来意。師曰、河裏失錢河裏漈」（大正藏五一・三五八c、京大本の漈を漈に作る）と見える。また「雲門広録」巻上には「問、如何是端坐念実相。師云、河裏失錢河裏漈」（大正藏四七・五四五c）と見える。「訓解添足」は「漈、作、漈可也」と注している。句意は「河に錢を落としたら河で漈う。ほかを探す馬鹿はいない」（『禪語辞典』）。C句は龐居士が河に財産を投じたという故事を踏まえ、雲門の語を引いたもの。ただし京大本はD句の注を施していないので、詩意全体をどう解釈しているか明らかでない。

（7）襄州居士……了事凡夫。注2に記したように龐居士の伝は諸資料に見えるが京大本と同文の出典は未詳。『龐居士語録』巻上には「元和中、居士北遊襄漢、随处而居。有女靈照、常鬻竹漈簍、以供朝夕。士有偈曰、心如境亦如、無実亦無虚、有亦不管、無亦不拘、不是賢聖、了事凡夫」（統藏二二〇・三一a）と見える。注5に挙げた入矢書はこの偈を「ありのままの心には境もありのまま、実体もなければ空虚もない、有も相手にせず、無にも腰をすえぬ、賢人や聖者ではござらぬ、かたをつけた凡人でござる」と訳している。

（8）州牧于公……枕公膝而化。龐居士の臨終の場面。「景德伝灯録」巻八「襄州居士龐蘊」章に「州牧于公問疾次、居士謂曰、但願空諸所有、慎勿実諸所無、好住世間皆如影響、言訖枕公膝而化」（大正藏五一・二六三c）と見える。州牧于公は山南東道節度使、于頔（うてき）の頃襄州の刺史を兼ねていた。龐居士と親交を結び、『龐居士語録』の編者と伝えられる。

(9) 或抄云……以給〓B句少較量の別注。世路計較、すなわち世渡りしてゆく才覚が無いという意で、注4とほぼ同旨。

(10) 第三句……機縁耳〓C句に雲門の語を用いたのは、龐居士一家が竹ザル売って糊口をしのぐはじめになったのは財産を河に捨てたことがきっかけだったが、それが「河に失う」という語に関連するため、と注したもの。

(11) 了事凡夫貌〓了事凡夫は注7の龐居士の偈にも見えるが、なすべきことにしっかりとカタをつけた凡夫のこと。A句の居士のあり方を称揚するもの。

(12) トット……ナイ物ゾ〓「トット」は、その程度、傾向が他とかけ離れて極端にいちじるしいさま（『時代別国語辞典・室町時代編』）をいう。龐居士一家が貧窮に徹しきつたことを言う。竜門文庫本に「ツヨウ貧乏シテ、ナニトモセウスヤウカナイソ」と見える。またA句の解釈について『夾山抄』及び『首書』に、家貧しく炊烟無しと雖も計較に勞せず計りごと無方なり、句中は本分無一物の処を坐断する」と見える。

(13) 肯テ怪ムト……此義可也〓B句「肯怪」の読み方二例を挙げ、それぞれの意味を注する。一に「肯て怪む」と読む場合は、A句の父・龐居士の貧窮の様を靈照が「どうしてそれほどに貧窮せられたのか」と不審に思う意となり、二に「肯て怪まんや」と反語に読む場合は、父の貧窮の事態を怪しむには及ばないという意になる。ここでは後者の解釈を以てよしとする意。京大本のルビも反語として

読ませている。

(14) 靈照二代テ云ナリ〓B句は靈照の気持ちを代弁したものである。注。同様の注は竜門文庫本に「靈照女ニナリカエツテ云ソ」と見える。

(15) 龐居士ハ……ラ云ゾ〓C D句解釈の一。龐居士の財産投棄と策籬売りの故事を、雲門の語に擬えたと注した上で、居士は手で河中の銭を取ったことになるが、靈照は柄の長いザルですくい取ったことになり、それゆえ父には勝ち得たとする。これは居士の臨終に先んじて靈照が死去したように、娘の方が父よりも禪の機鋒が勝っていることを（注2参照）言うものだとする解釈。この解釈について『訓解添足』は「或云、龐居士直擔、靈照以柄取者、非也」と批判する。竜門文庫本には「居士ハ利ヲ失シテ、靈照女ハ柄ノ長キ策籬ヲ以テシスマイタソ。是ハ靈照女カ父ヲタシヌイテ、父ノ座ヘチャットアカツテ死タラ云ナリ」と見え、父娘の禪機の優劣で解釈する点で共通する。贏得について『禪語辞典』は「せいぜい……に終わる。……となるのが落ちだ。勝ち取った、せしめたという積極的な語気ではなく、得たものといえは結局これだけという意」と説明するが、ここでは「売有餘利也」（『説文』）の意。

(16) 又財宝ヲ……モアルソ〓C D句解釈の二。財宝投棄し策籬売りの生活となった故事を、世俗的な富貴を捨ててかえって本分無一物の境地になった（真の意味での富貴が増した）と称揚する義。

(17) 又財宝ヲ……聞ヘヌゾ〓C D句解釈の三。「西江吸尽」という語

は「一口吸西江」として知られる龐居士と馬祖との問答を踏まえている。『龐居士語録』卷上に「居士、後之江西參馬祖大師。問曰、不与方法爲侶者是什麼人。祖曰、待汝一口吸尽西江水、即向汝道。士、於言下頓領玄旨」(統藏一二〇・二八a)と見える。居士が馬祖のもので覚醒された禅機によつて、世俗的価値を捨てた西江から真の宝を撿したことを「かち得た」と取る意。だがこの解釈は龐居士を称

揚することに偏り、詩題の靈照女のこと为主题にならないと指摘する。

(18) 総別……人二問へ二総別は、個々の事柄のおおよそのところを概括的に捉えていうさま(『時代別国語辞典・室町時代編』)、すなわち、概して。以上のCD句を解する三説は総じていずれも明瞭なものではない、有識の人に質問せよ、というもの。

## 0186 魚籃觀音

### 【京大本略註】

#### (186) 魚籃觀音

又云、馬郎婦有容貌。人多愛之。籃云、觀音經一夜暗誦者<sup>ニ</sup>嫁<sup>セン</sup>。誦者廿一人。又云、金剛經一夜誦者相嫁。誦者十人。又云、法華經七日誦者嫁。其時馬郎暗誦<sup>ニ</sup>之。籃則泊然而逝矣云々。見于前。又山谷連理松枝詩云、金沙灘頭鎖子骨、不妨隨俗暫嬋娟。按統玄怪錄、昔延州有婦人、頗有姿貌、少年子悉与之狎昵。數歲而没、人葬之道左。大曆中有胡僧、敬礼其墓曰、斯乃大慈悲喜捨、世俗之欲無<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>徇<sup>カ</sup>焉、此即鎖骨菩薩、順緣已<sup>ニ</sup>尽<sup>ル</sup>耳。衆人開墓以視、其骨鉤結<sup>シテ</sup>皆如鎖<sup>ノ</sup>狀。為<sup>ニ</sup>起<sup>レ</sup>塔<sup>ニ</sup>云々。

A 沿<sup>ソ</sup>門<sup>ツテ</sup>壳<sup>ニ</sup>弄<sup>タ</sup>還<sup>タ</sup>嬌容<sup>ヲ</sup>

B 多<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>無<sup>シ</sup>人<sup>ヲ</sup>着<sup>ウ</sup>脱空<sup>ニ</sup>

C 三月桃花春浪暖<sup>ナリ</sup>

D 錦鱗那得<sup>ソ</sup>在<sup>コト</sup>籃中<sup>ニ</sup>

嬌容者、為<sup>ニ</sup>悦<sup>レ</sup>己者<sup>ニ</sup>嬌也。脱空者、虚妄之謂也。水経云、鱣鮪出<sup>ニ</sup>鞏穴<sup>ニ</sup>、三月三日上<sup>ニ</sup>龍門<sup>ニ</sup>、登得<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>龍<sup>ニ</sup>、否則<sup>ハ</sup>点額<sup>クツル</sup>而還。

〔欄外注〕

椿庭和尚云、別有魚籃觀音伝。余於唐土觀看之。見于前。  
私云、馬郎婦本意、不可在籃中魚也。

〔傍注〕

B 無<sub>下</sub>会<sub>二</sub>得<sub>ル</sub>箇脫空底<sub>ヲ</sub>人<sub>上</sub>也。

〔出典〕

未詳。

〔校異〕

\*悲—大悲 \*之—ナシ \*即—乃

〔略註鈔〕

(186) 魚籃觀音

馬郎婦<sub>マロウフ</sub>ノコトハ、シカトアルコトゾ。魚籃觀音ハ、未  
タ本掬<sub>マ</sub>ヲ見ザルナリ。馬郎婦ト魚籃觀音ハ、同体異名歟。

A 沿<sub>ソツ</sub>レ門<sub>ツテ</sub>売<sub>ラ</sub>弄<sub>ノタ</sub>逞<sub>ス</sub>嬌容<sub>ヲ</sub>

人家ノ門ニ沿テ、魚メセト云テ売ル。逞<sub>ス</sub>嬌容<sub>ヲ</sub>トハ、  
コビテ美イヲ云ソ。

B 多<sub>ク</sub>是<sub>レ</sub>無<sub>シ</sub>人<sub>ノ</sub>著<sub>ル</sub>脱空<sub>ヲ</sub>

脱空<sub>タツク</sub>ハ、註ニ虚妄ノ義トシタソ。美イナリヲシテ仏意  
ニ引入フトシタハ、偽テシタコトソ。ソレヲ人ハ知ヌゾ。

『江湖風月集略註』研究(十五)(飯塚・佐藤・比留間・堀川)

又解<sup>9</sup>脱空寂ノ義也。觀音ノ色ノニセラル、モ、脱空  
ノ処ニ引入<sub>シ</sub>為<sub>メ</sub>ナリ。アレトモ脱空ヲ得ル者ガ無キナ  
リ。

C 三月桃花春浪暖<sub>アリ</sub>

D 錦鱗那得<sub>ソツ</sub>在<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>籃中<sub>ニ</sub>

觀音ノ売ラル、魚トモハ、三月ノ暖カナ時分ニハ、皆ナ  
竜ト作テ飛出セフズホトニ、籃中ニハ一ツモアルマジ  
イゾ。唐土テハ活キナガラ魚ヲ売ルニ依テ、如<sub>レ</sub>此云ゾ。  
言<sub>ハ</sub>一切衆生ヲ魚ニ譬ヘタソ。一切衆生ヲ皆ナ救ワフ  
ズホトニ、籃中ニ魚ハアルマシイゾ。又觀音ヲハ過去

テハ正法明如来ト申シタソ。衆生化度ノ為ニ菩薩トナ  
ラレタソ。観音モ衆生ヲ化度シ了タラバ、仏ニナラレ  
ウズホトニ、籃中ノ魚モ金鱗トナラフズトナリ。此ト  
キハ、魚ヲ観音ニ比スルナリ。

【注（186）】

（1）馬郎婦有容貌……逝矣云々『宋濂の『護法録』に収める「魚籃  
観音像賛序」に次のようにある。「予按観音感應伝、唐元和十二年  
陝右金沙灘上、有美豔女子、挈籃粥魚、人競欲室之。女曰、妾能授  
経、一夕能誦普門品者、事焉。黎明能者二十。女辞曰、一身豈堪配  
衆夫邪。請易金剛経、如前期。能者復居其半。女又辞、請易法華経、  
期以三日。唯馬氏子能。女令具礼成婚。入門、女即死。死即糜爛立  
尽。他日有僧同馬氏子、啓藏觀之。唯黄金鎖子骨存焉。僧曰、此観  
音示現、以化汝耳。言訖飛空而去。』『訓解添足』はこれを魚籃観音  
の典故として、「人競欲室之」までを載せる。『略註』は、ここまで  
を「馬郎婦有容貌。人多愛之」とした上で、この美女が言い寄る男  
たちに観音経、金剛経、法華経の順番で暗誦を求め、一人だけ残つ  
た馬郎に嫁いだが、死んでしまったことを記す。「魚籃観音像賛序」  
を節録したものか。『略註』では、この美女「籃」が馬郎に嫁いで  
死んだことをストーリーのポイントにしている。「魚籃」と「馬郎婦」  
を同一人と解釈しようとしているようである。「魚籃観音像賛序」  
にあつて『略註』に抜けている要素として、この美女が「陝右金沙  
灘上」の人であつたこと、埋葬後に僧がその墓をあばいたら「黄金  
鎖子骨存」が残つていて、観音の示現だとわかつたことが挙げられ  
る。『0063馬郎婦』では、『隆興編年通論』卷二三、唐元和十一  
年の類似の話が引用され、こちらのほうが「魚籃観音像賛序」より  
さらに詳しい。



(2) 山谷……為起塔云々『黃山谷詩集』卷九「戲答陳季常寄黃州

山中連理松枝二首」の二首目に「老松連枝亦偶然、紅紫事退獨參天、金沙灘頭鎖子骨、不妨隨俗暫嬋娟」とある。『略註』に抜けている「陝右金沙灘上」「黃金鎖子骨存」をふまえた句で、「金沙灘頭の鎖子骨は、生きて肉体のある間はあでやかな姿の夫人だった」という意である。後半の二句の任淵の注に「伝灯録、僧問風穴、如何是仏穴曰、金沙灘頭馬郎婦。世言觀音化身。未見所出。按統玄怪録、昔延州有婦人頗有姿貌、少年子悉与之狎昵、數歲而沒。人共葬之道左。大曆中有胡僧、敬礼其墓曰、斯乃大慈悲喜捨。世俗之欲無不徇焉。此即鎖骨菩薩。順縁已尽爾。衆人開墓以視其骨、鈎結皆如鎖狀、為起塔焉。馬郎婦事大率如此」とあり、『略註』の『統玄怪録』引用はこれに拠っている。『略註』が省いた「伝灯録」云々は『景德伝灯録』にはなく、『五灯会元』卷一、汝州風穴延沼禪師章に「問、如何是清浄法身。師曰、金沙灘頭馬郎婦」(統蔵一三八・二〇四a)とある。『太平広記』卷一〇一、延州婦人には任淵の注より詳しい記述がある。

(3) 水経云……点額而還『水経注』卷四に「尔雅曰、鱣、鮪也。出鞏穴三月則上渡龍門。得渡為龍矣。否則点額而還」とあるのに拠る。『訓解添足』は、明代の類書『天中記』卷五六、龍門の条にこの全文を載せると指摘している。

(4) 椿庭和尚『椿庭海寿』(三三八―一四〇二)、一三五〇に入元、元明に二十三年間滞在した。『訓解添足』には、「魚籃馬郎別。予在中

華、見魚籃伝」という発言を伝える。

(5) 馬郎婦本意不可在籃中魚也『馬郎婦の本意は籃中の魚にはない。』『略註鈔』に述べられるように、馬郎婦の本意は衆生を救うことであり、籃中の魚を売るのではない、ということ。

(6) 無会得箇脱空底人也『脱空の境地を会得した人はいない。B句の脱空を悟りにつなげる意の語とした解釈で、注(9)も参照。』

(7) 馬郎婦ノコトハ……同体異名歟『馬郎婦のことは確かであるが、魚籃觀音は確かな典拠がわからない、とした上で、両者は同じものの異名か、とする。ここまで引用した諸書も、魚籃觀音について明らかにしようとしながら、成功していないように思われる。』

(8) 脱空ハ……知ヌゾ『脱空を虚妄の意とした略註の説に従えば、B句は「魚籃觀音が美しい偽りの姿で仏の教えに導こうとしたこと」を、人は知らない、とする。脱空を虚妄の意とするのは、脱空の標準的な解釈。『禅学大辞典』『脱空』には「内心は空虚で実がないのに、しかも外に向かい誇張すること」、「禅語辞典」には「ホラを吹く、うそをつく」とある。』

(9) 又解脱空寂……無キナリ『B句の別の解釈。脱空を解脱空寂の意とすれば、魚籃觀音がいろいろとするのは、衆生を解脱空寂の境地に導くためだが、その境地に達する者はいない、とする。傍注もこの方向のようである。』

(10) 言ハ……アルマシイゾ『D句で、籃中に錦鱗(＝魚)がいない」というときの魚は、すべての衆生の喩えである。魚籃觀音はすべて

の衆生を救おうとしているのだから、魚は救われて籃中にはいなくなる、とする。

（11）又観音ヲ……比スルナリⅡD句の別の解釈。観音は如来だったのに衆生を救うために観音菩薩の姿になって現れた。その願いが成

就したときには仏（Ⅱ如来）になり、籃中の魚も金の鱗の竜になる。こう解したときには、竜になる前の魚を如来になる前の観音になぞらえている、とする。

0187 孤舟

【京大本略註】

（四九）天台方庵会和尚

抄云、嗣無準、住雪豆。宗派図、雪豆方庵智圻在無準下。

（187）孤舟

A 一舸ノ玻璃凝テ復流

B 糸綸慵把触<sup>ル</sup> 鼈頭<sup>ニ</sup>

C 来時無<sup>ク</sup>伴去<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>侶

D 篷底羞<sup>ハシ</sup>看<sup>ミ</sup>月半鉤

古人題子猷訪戴図云、四山如玉夜光浮、一舸玻璃凝不<sup>レ</sup>流、若使<sup>メハ</sup>過<sup>テ</sup>門相見<sup>シ</sup>了<sup>テ</sup>、千年風致一時休。玻璃、謂水也。触<sup>（3）</sup>鼈頭者、海東有岱輿・貝嶠・方壺・蓬萊、根無所連、隨波上下。帝使<sup>ニ</sup>巨鼈十五<sup>一</sup>拳<sup>レ</sup>首戴<sup>レ</sup>之。五山始峙而不動。童伯国之大人、一釣連六鼈。於是二山流於北極。古人者、来<sup>（子脱カ）</sup>儀詩也。今奪胎了。又任公子以五十犗釣鼈事。

【欄外注】

或抄云、凡舟舡以濟渡為義、今此孤舟糸綸懶把、不似岩頭船子以渡生為意也。单丁独弄篷窓見月而已。仍愧月似鉤也。

【傍注】

A 「復」這一字換之耳。

B 「慵」老倒。「触」懶接化度生也。

D「<sup>(8)</sup>差」賊。

【出典】

未詳。

【校異】

\*圻―坊    \*峙―崎    \*国之一之国有    \*古人者来儀詩也今奪胎了―ナシ

【略註鈔】

(四九) 天台方庵会和尚

(187) 孤舟

A 二舸ノ玻瓈凝<sup>テ</sup>復<sup>タ</sup>流<sup>ル</sup>

風雅集ノ句ヲ一字直イテ、一ノ句ニ置イタゾ。舸ハ舟也。

玻瓈ハ水ノ色ヲ云ゾ。凝<sup>⑩</sup>不<sup>レ</sup>流ト云ヘハ、法理ノ上ニ

不<sup>レ</sup>叶ホトニ、凝<sup>テ</sup>復<sup>タ</sup>流<sup>ル</sup>トシタソ。凝タレトモ流ルコ

ソヨケレ。

B 糸綸<sup>シ</sup>慵<sup>シ</sup>把<sup>テ</sup>触<sup>レ</sup>鼈<sup>ニ</sup>頭<sup>ニ</sup>

大船ナラバ、巨鼈ナドヲモ釣フズト思ワフズガ、是ハ

孤舟ヂヤホトニ、鼈ヲ釣フズトモ思ワスソ。<sup>(スカ)</sup>

C 来時無<sup>ク</sup>伴<sup>ニ</sup>去<sup>ルニ</sup>無<sup>シ</sup>侶

孤舟ヂヤホトニ、来ルトキモ伴モ無ク、去ルトキモ侶

モ無イソ。

D 篷底<sup>(10)</sup>差看月半鉤

唯一人チヤホトニ、月ノ篷底ヲ照スモ差カシキナリ。

又月サヘ鉤リノ如クチヤニ、我ハ孤舟チヤニ依テ、魚

ヲモエ釣ラスト恥ルナリ。底意ハ、一舸ハ自己ヲサス

ナリ。玻瓈ハ法性水ヲ指スナリ。糸綸―トハ、第二

儀門ニ下ヌソ。来時―、度生ノ意無<sup>キ</sup>也。篷―、度

生<sup>ノ</sup>旨無<sup>イ</sup>ヲ差ルナリ。アレトモ、元来衆生<sup>ノ</sup>度スベキガ

在テコソ。

## 【注（187）】

（1）抄云……無準下。『仏祖宗派綱要』無準下に「雪竇（方庵）智圻」とあり、また『増集続伝灯録』卷四目録の「径山無準範禪師法嗣」に「雪竇方巖根禪師」の名があるが、伝はない（続藏一四二・三六七d）。『訓解添足』も『宗派図』（『仏祖宗派綱要』『続伝灯録』両者を引く。「竜門文庫本」は「諱智圻、嗣無準。『宗派』載之。或ハコレヲ方岩和尚ト載スル本アリ。ソレハ『宗派』無準下ニミヘス。又ハ方庵会トアルハ、字訛乎」と記して、方庵智圻を正しいとする。

（2）古人題……謂水也。『聯珠詩格』卷七「用若使字格」に來子儀「訪戴図」として載る。五山版は「璩」に作る。他に、江湖派詩人の総集『前賢小集拾遺』卷四にも「子猷訪戴」の題で載り（作者名「來子儀（梓）」、第一句「如」を「搖」に作る）、ここから『全宋詩』卷三三四に収める。また、宋代の編者不明の総集『詩家鼎鑪』二卷卷上に「南州來梓子儀」の「子猷訪戴」として収め（第一句「如」、やはり宋代の筆記である趙与時『賓退録』卷五にも収める（第一句「搖」）。なお、『略註鈔』は「風雅集」を典故として挙げる（「竜門文庫本」も同様で、「李儀題子猷訪戴図」とする）が、類似の書名の『皇元風雅』（五山版あり）『国朝風雅』はともに元詩の総集で、この詩を収めない。

（3）触鼈頭……於北極。『列子』湯問篇を節略したもの。いわゆる三山（東方の海に浮かぶ仙境の島）の由来を説く話で、直接には「韻

府群玉」卷五・下平四豪・鼈の「戴山鼈」と「釣六鼈」を合体させたものが最も近いが、それだと「於是」以下がないので、『事文類聚』前集卷十四・地道部・衆山の「巨鼈戴山」（後集卷三十五・介虫部・鼈にもあり）と「於是」以下のある卷三十七・民業部・釣者の「一釣六鼈」（同前・鼈にもあり、ただしここでは「於是」以下なし）とを参照した可能性もある。

（4）古人者……奪胎也。寛永版本にはない記述。注（2）の詩の作者を示すとともに、傍注にもあるように、「不」の一字のみ「復」に変えて別の情景描写として用いたことを換骨奪胎と評している。すなわち、もとの詩が雪景色に見とれて動こうとしない舟の描写であったのを、釣り糸を垂れてしばらくじっとしていると想うとまた場所を変える、といった釣りの様子に転換したこと。「玻璩」は『略註鈔』に「水ノ色ヲ云ゾ」とあるように、波一つたない水面をガラスに喩えたもの。

（5）又任公子……釣鼈事。『莊子』外物篇に見える話。五十頭の去勢牛を餌にして一年の間糸を垂れ、大魚を釣り上げたというもので、鼈を釣ったのではない。この話も『事文類聚』前集卷三十七・民業部・釣者に見える。

（6）或抄云……愧月似鉤也。舟と言えば、巖頭全藏や船子德誠のように渡し船の船頭をしながら人々を濟度していた名僧が思い浮かぶが、私はそんなこともせず、ただ一人釣り糸を垂れているだけの意け者で、蓬の窓から月を見ると、月もちょうど釣り針の形になって、

私を皮肉っているようだ、と恥じ入っている様と取る。「単丁」は独身者、あるいは一人住まいのこと。『略註鈔』の「底意」とほぼ同じ内容。

(7)「慵」老倒「触」懶接化度生也〓B句の底意を説く。年老いて人々に教えを説くことも面倒になった様、とする。すなわち、注(3)部分の大亀を釣る話を、積極的に接化することの比喻と捉えたもの。

(8)賊〓D句「羞」の傍注。心の内の賊、すなわちここでは怠惰な態度、を恥じる、の意か。なお、この前後に後筆の書人があり、難読であるが、ルビと見る。

(9)凝不流……ヨケレ〓注(4)で述べた一字の変更を、理屈が通ったものとして評価する。詩の誇張表現であることを理解していないのか、あるいは偏頗にそのような表現は有害としたのか。

(10)唯一人……恥ルナリ〓D句の表面上の意味を二説述べる。一人で釣りをしている孤独さを月光であからさまにされて恥ずかしい

## 0188人之江陵

### 【京大本略註】

(188)人之江陵<sup>二</sup>

江陵者、南国也。

A塵消<sup>リシテ</sup>六国古風清<sup>シ</sup>

B嗜<sup>タリシ</sup>富愁<sup>レ</sup>貧復<sup>テ</sup>戒<sup>ム</sup>程<sup>ヲ</sup>

C沙漠ノ金声孤客ノ枕

〔竜門文庫本〕は「月カ我ヲナクサメテトモナウハ、ハツカシキ也」と取る)、または、月も釣り針の形をしてまるで釣りをしているかのようなのに、人間である私が全然釣れないのは恥ずかしい、との解釈。後者の、月の形を鉤に喩えたとするのは、注(6)京大本欄外注と共通する。

(11)底意ハ……在テコソ〓全句の底意を述べる。「法性水」は法性海、真理の世界を広大な海に喩えたもの。前半は、そこに浮かぶ舟を悟りに達した自己と見て、その世界にとどまって動かない様とする。後半は、大亀を釣り上げる、すなわち、差別の世界に降りて衆生を救おうとする行動(第二義門に下る)もせず、いつも一人きりである(『訓解添足』は「与万法不侶底也」とする)のが(月)がありありと見せつけて)恥ずかしい、とする。『夾山鈔』『考証』は号頌と見ていて、その場合だと、師が弟子に済度を促す内容と取れる。

D 胸中莫<sup>タ</sup>起<sup>ス</sup>中閑兵<sup>ラ</sup>

②六国者、戦国合従之時、加<sup>レ</sup>秦<sup>ツ</sup>曰<sup>ニ</sup>之七雄<sup>一</sup>。亦曰縦横<sup>ノ</sup>国<sup>ト</sup>也。此云六国者、指六朝也。抄云、謂六根、六賊也。蓋此一篇借<sup>ニ</sup>用闕諍<sup>一</sup>、以言<sup>ニ</sup>心兵<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>戒也。嗜富<sup>一</sup>者、人之常情也。戒程者、途中善為<sup>ノ</sup>之謂也。戒字、涉于万般可觀矣。沙<sup>⑤</sup>漠者、北地也。金声者、兵革之声。或云、鐸鈴声也。文道鐸用木舌、武道鐸用鉄舌、術道鐸用銀舌。閑兵者、妄想之謂也。胸中者、范仲淹守慶州。賊云、小范老子、胸中自有数万甲兵、不<sup>レ</sup>比<sup>ニ</sup>大范老子<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>欺<sup>ニ</sup>。抄曰、嗜富愁貧、就<sup>ニ</sup>求法<sup>一</sup>而謂也。古德因僧問、牛頭未見四祖時、為甚麼百鳥啣花献。答云、富嫌千口少。問、見後為甚麼不啣花献。云、貧恨一身多。

〔欄外注〕

或<sup>⑩</sup>云、嗜富者、建立也。愁貧者、掃蕩也。戒程者、為大法保重<sup>セヨ</sup>也。  
亦嗜<sup>一</sup>四字、求法也。幸是本来無一物、然法行脚無事生事。

〔傍注〕

D句 莫妄想。

〔出典〕

未詳。

〔校異〕

\*也——也勝覽二十七江陵府湖北路也

〔略註鈔〕

(188) 人之<sup>ク</sup>江陵<sup>ニ</sup>

A 塵消<sup>シテ</sup>六国古風清<sup>シ</sup>

六国トハ、昔シノコトナレトモ、借り用テ云カ。爰<sup>⑫</sup>テハ、六朝ノコトソ。六朝ノ兵塵収テ、古風ノ如ク清イソ。

B 嗜<sup>ミ</sup>富<sup>ヲ</sup>愁<sup>テ</sup>貧<sup>ヲ</sup>復<sup>タ</sup>戒<sup>シ</sup>程<sup>ヲ</sup>

是<sup>(13)</sup>ホト大平ヂヤニ、江陵へ行クハ、富ヲ嗜ミ、貧ヲ愁  
イテバシ行クカ、禪道仏法ヲ学セフトテ行クカソ。戒<sup>(14)</sup>  
程トハ、途中ノ用心ヲスル義ソ。送行ヂヤホトニ、  
戒<sup>(15)</sup>程ヲト云心ニヨミタケレトモ、上ヨリノツ、キガ、  
サウハヨマレヌホトニ、戒ムトヨンデ、只途中ノ用心  
ヲヨクシテ行ク、ト云心ニ見ヤウゾ。

### C 沙漠ノ金声孤客ノ枕

沙漠ハ、北地デイツモ戦イノアル処ソ。金声ハ、兵革  
ノ声也。又鈴鐸ノ声也。沙漠ノ辺テ、孤客テ、合戦ノ時  
ニ打ツ金声ヲ聴フゾ。

### D 胸中莫<sup>(16)</sup>易<sup>(17)</sup>起<sup>(18)</sup>閑兵

惡フセバ、金声ヲ聴テ、胸中ノ閑兵ヲ起サフゾ。是ホ  
ト閑カナ御代ニ、カマイテ閑兵バシ起スナソ。底意ハ、  
嗜<sup>(19)</sup>富ハ、出世辺ソ。愁<sup>(20)</sup>貧ハ、不出世ソ。出世ノ法ヲ  
求フトテ、法戦ノ地ヘ行イテモ、惡フセハ、悟解ガ胸  
中ノ閑兵トナラフソト也。

### 【注 (18)】

(1) 江陵者南国也。方庵の会下を辞して、江陵へと参学する僧を送る、送行の頌。「寛永本」は、「勝覧二十七、江陵府湖北路也」と注する。ちなみに、江陵（現在の湖北省南部）の北郊には、春秋時代、楚の国都郢が置かれた。「龍門文庫本」は「人之金陵」、金陵、或本二ハ、作「江陵」也。金陵ハ、見「于方輿前集第十四」。六朝所都也。今金陵ノ方エ、参学シニ行ク人ノタメニ送行ノ頌也」と注する。頌の題を「人之金陵」としており、「金陵」は、建康（南京）に比定する。「襟帯集」は、頌の題を「送人之江陵」とし、「一ハ、南国也。金陵ノ方ハ参学ニ行ヲ云ゾ」と注する。「0034 送人之南国」参照。

(2) 六国者戦国……亦云南北朝也。A句の注。「合従」「従」は「縦」と同意。中国の戦国時代、南北に連なる韓・魏・趙・燕・楚・斉の六国が連合して秦に対抗したことを言い、又、「連衡」は、六国が並んで秦に仕える策を言う。秦國と六國とを併せて「七雄」と言う。六國は合従連衡して、秦に対応したことから「縦横國」とも言う。別の説に、「六國」は、「六朝」を指し、南北朝時代を言うとする、の意。

(3) 抄云謂六根……心兵可戒也。或抄によれば、「六國」は、「六根」「六賊」の意とする。仏教において、人間の感覚器官である「六根」は、それぞれの対象（六境・六塵）に触れて煩惱を起こすものとなることから、悪事をなす盗賊に喩えられる。この頌は、全体として

句面は争い（戦争）の言辭を用いながら、句中は「心兵（自己の心）」を慎むべきことを言うとする。

（4）嗜富——者……万般可觀矣。B句の注。富有を好み、貧乏を嫌うのは、世間の情である。「戒程」は、「途中善為（道中お気を付けて）」の意であり、別れに際しての挨拶の語である。「戒」の字は、（別れの挨拶の意に解するだけではなく）さまざまな事柄に付いてみるべきであるとする。

（5）沙漠者北地也……術道鐸用銀舌。C句の注。「沙漠」は、「北地」、即ち「北狄」（異民族）の活動する地を言う。歴史的に幾度となく戦いを繰り返してきた地であることから、常に戦争の火種を抱えることを言うか。「金声」は、「龍門文庫本」は「旧抄（先行の抄）」を引用して「旧抄云、金声ハ、兵器之声也。」とする。『訓解添足』は、「金声、兵器甲冑之声、或銅鐸之声」とあり、「金声」は兵器甲冑の音、或いは戦を知らせる銅鐸の音と解する。「文道鐸用木舌」以下、典拠未詳。「鐸」は、鐸鈴とも言い、銅または青銅で鑄造した大型の鈴。古代中国では、教令を宣べる際に振り鳴らした。文事には木製の舌、軍事には金属製の舌を用いたと言う。林之奇『尚書全解』卷十三に、「礼有金鐸有木鐸、其体皆以金為之。惟舌則有金木之異。木舌木鐸也。文事則振之。金舌金鐸也。武事則振之」と見える。「銀舌」については、未詳。

（6）閑兵者妄想之謂也。『閑兵』は、無用の兵、ここでは妄想の意味であるとする。注（3）参照。

（7）胸中者范中淹……大范老子可欺。范仲淹（九八九—一〇五二）、中国北宋の文官、趙元昊が建国した西夏と交戦状態になると韓琦とともに前線の指揮にあたって活躍した。「胸中」の語は、范仲淹が、陝西路慶州（現在の甘肅省）の知事であったとき、彼の地の胡人は次の様に言った。小范老子（范仲淹）の胸中には、数万の武具を身に着けた兵がいる、大范老子（范雍）の欺くことができたのとは比べようもない、との意。『訓解添足』には、「△范仲淹云云、以下至<sup>ルマ</sup>可欺。氏族排韻七（四十／八丈）載スル文」とあり、『氏族大全』卷七を典拠として掲げるが、見出せない。『韻府群玉』卷七、「下平、八庚」に「胸中甲兵、〈范仲淹守西夏賊曰小范老子——自有数万——不比大范老子可欺也。言行録〉と見える。『宋名臣言行録』前集卷七には、上掲の文に続き「戎人呼知州為老子。大范謂雍也」とあり、『東都事略』卷五十九上にも「小范老子」以下の一文が見える。大范老子こと范雍（九八一—一〇四六）は、范仲淹より先、趙元昊の反乱に対応した。

（8）抄曰嗜富愁貧就求法而謂也。或抄によれば、「嗜富愁貧」は、求道のあり方について言うとする。注（11）参照。

（9）古德因僧問……貧恨一身多。B句に関する注。「富」と「貧」とが対をなす禪語、「富嫌千口少、貧恨一身多」を引用する。古德に僧が尋ねる、「牛頭法融が四祖道信に未だ相見していない時、どうして百鳥は花を献じて供養したのか」。答えて言う、「富有にあっては、千人を養うほどの財が有っても満足できない」。問うて言う、「四



祖に相見した後は、どうか。「貧窮にあつては、我が身一つも持て余す」。悟道の境界が明らかな時、百鳥はそれを知り供養するすべを持つが、悟り、聖解の跡形を滅尽した時（無一物の境界に至ったとき）、百鳥はそのすべを失う、の意か。このままの形の典拠は見出せないが、『続燈録』巻八「上方希元」章に、「問、牛頭未見四祖時如何。師云、富嫌千口少。僧曰、見後如何。師云、貧恨一身多」（続藏一三六・六九一b）と見える。

(10) 或云嗜富者……大法保重也。C句の注。「嗜富」は「建立」の意で、方便施設を用い、宗旨を闡揚することを言い、「愁貧」は「掃蕩」、有らぬ見解を払い尽くすことを言う。「訓解添足」も同様に注する。「戒程」は、仏道修行のため、御身大切に、の意とする。

(11) 亦嗜一四字……行脚無生事。注(8)に関連する補註。「嗜富愁貧」の四字は、求法を言う。私見によれば、「然法」、或いは「禪法」か。幸いなことに本来無一物の境界にありながら、他所に禪法を求めて行脚するのは、「無生事（事なくして事を生ず）」、わざわざ事を構えることだ、の意。

(12) 爰テハ六朝……如ク清イソ。注「六朝」とは、「六朝」のことを言う。南北朝の戦いが終わって、上古の様に清らかである、の意。「龍門文庫本」には、「六国ハ、六朝ヲ指シテ云也。今ハ大平ニテ、兵塵シツマリテ、古風アリ。堯舜ノ時代ノヤウナルソ」とあり、『襟帶集』も「古風清トハ、イクサコトモナウテ、堯舜ノ御代ノ様ニ、目出度ゾ」と注する。これによれば、「古風」とは、堯舜ノ聖代の様に、

太平の世の中を言うとする。

(13) 是ホト太平……トテ行クカソ。これほどの太平の世の中に、わざわざ江陵へ行くのは、世人の如く、財の豊かなるを望み、貧苦を嫌つてのことか、自己の境界に飽き足らぬ修行者の如く、他の善知識の教えを学びたいと思つて行くのか、の意。「龍門文庫本」には「嗜<sup>シム</sup>富<sup>フ</sup>ヲ、大平ノ時代、ヨソニユクハ、何ソナレハ、アマリ疲勞シテモ、サテチャホトニ、コタノシウモナラハヤト思テ、遙々戒程<sup>ツ</sup>行也。言ハ、此僧、学地<sup>ニ</sup>テアルホトニ、一言一句ヲモ、知識<sup>ニ</sup>逢テキカウト思テ、戒<sup>メ</sup>程<sup>ヲ</sup>行也」とある。句面は、太平の時代にわざわざ他所に行くのは、貧窮して疲弊するのは、あまりに味気ないので、少しでも豊かに安楽になりたいと思い、遙々と旅をして行くのである、の意であり、句中は、この僧は未だ修行の段階にある（悟道していない）ので、禪の教えの一言一句をも、善知識から聞きたいと思つて行脚する、の意と解する。『襟帶集』も同様に「嗜<sup>シム</sup>一<sup>イチ</sup>是程太平時代チャニ、ヨソヘ行クハ、ナンノ用ゾ。ナレハ、学地テイテ未悟トキハ、ナンタル殊勝ナ法門ヲモキカウト思テ、佛見法見ヲモトムル、貧ナル者カ、ナニトシテモ、タノシウナラウト思ウ様ナソ」と注する。

(14) 戒程トハ途中……心ニ見ヤウゾ。注「戒程」は、旅の途中の用心をする意である。この頃は、「送行」の頃であるから、「道中気を付けよ」の意に読みたいところだが、上の措辞「嗜富愁貧」との続き方が、そのようには読むことが出来ないので、「戒（いまし）む」

と訓じて、「只途中の用心をして行く」の意に解釈しよう、の意。『訓解添足』には、「戒程、今但言「發行」而已。旅行、通語也。途中善為」とあり、「戒程」とは、「発する」と言う意であり、「旅行する」の語に通ずると解する。

(15) 沙漠ノ辺テ……金声ヲ聴フゾ＝戦が繰り返される辺境の沙漠で、よるべない孤独な旅人は、その枕辺に兵具の音を聞くことになるぞ、の意。おちおち眠れやしないし、心安らわぬ。私見によれば、お前が目指した江陵（本来の家郷、太平無事の世界）とは異なり、不毛な戦が繰り返される沙漠（妄想渦巻く世界、禅道仏法の法戦場）で独り心かき乱すだけだ、の意か。『訓解添足』は「乃汝非<sup>レ</sup>向<sup>二</sup>真<sup>一</sup>、江陵<sup>一</sup>、却<sup>テ</sup>向<sup>二</sup>外<sup>一</sup>辺沙漠戦争之地<sup>二</sup>也<sup>一</sup>。其如<sup>二</sup>真<sup>一</sup>、江陵<sup>一</sup>、六国常清而已<sup>一</sup>」と注するのが参考になる。「龍門文庫本」は、「沙漠、金声孤客、枕トハ、アチヘ行<sup>ユ</sup>タラハ、胡ニ近<sup>イ</sup>方<sup>チ</sup>ヤホトニ、合戦時ニウツ金声ヲ可<sup>レ</sup>聴也<sup>一</sup>」とは、この僧が赴く江陵が実際に地理上、胡地に近い事を指摘する。この解釈は、「江陵」を湖北の地に解するか、南国、或いは金陵と解するかによって異なる。

(16) 悪フセバ金声……バシ起スナソ＝下手をすると、兵具の音を聞いて、胸中の無用の兵をおこすことになろう。これほど太平の御代

にわざわざ役にも立たない兵を起こすな、の意。「龍門文庫本」は、「胸中莫<sup>レ</sup>易<sup>シムルコト</sup>」起<sup>二</sup>閑兵<sup>一</sup>トハ、金声ヲ聴テ、胸中ニ用ニモタ、ヌ、イタツラナル兵ヲ起スナト也。弓ガナ、刀ガナト思ハ、胸中（山谷句ソ）有五兵也。兵ハ、兵器也」とあり、無用の兵を起すな、の意であるとし、兵を起こすとき、弓矢、刀剣の兵具が欲しいと思うのは、「山谷詩」に、「胸中有五兵」（典拠未詳）の語があると言う。

(17) 底意ハ嗜富ハ……ナラフソト也＝D句の底心は、「嗜富」は出世辺（悟りを求める功勳辺）の事であり、「愁貧」は「不出世（無一物、無事の境界）」の事である。出世の法（仏見法見）を求めようと、法戦の地（江陵の叢林）に赴いても、悪くすると、そこで得た悟道勝解が胸中の閑兵（煩惱妄想）となるばかりだ、の意。『襟帶集』には、「ナニヲ兵ニタトユルソ。ナレハ、イタツラニ忘想ヲ起ス事ゾ。アマリナニモ不知呈ニ、参学シテ殊勝ナ事ガ知リタイナント、思タハ、皆閑兵、忘想也」とあり、何を「兵」に譬えるかとすれば、いたずらに妄念を起こすことである、自己の無知を知って勝れた教えを知りたいなどと思うこと自体、全てか「閑兵」・「忘想」にほかならないとする。

0189月江

【京大本略註】

(五〇) 東州／瑞藏主

嗣<sup>(1)</sup>虚堂。住天台万年。或云、諱惟俊<sup>\*</sup>。宗派図、万年東州惟俊<sup>\*</sup>。宗派、虚堂之下無之<sup>\*</sup>。

(189) 月江  
号。

A 長天<sup>ネエ</sup>粘<sup>レ</sup>水<sup>ニ</sup>々<sup>ネフ</sup>黏<sup>レ</sup>天<sup>ニ</sup>

B 一片<sup>ノ</sup>氷輪上下<sup>カ</sup>円<sup>ナリ</sup>

C 千里<sup>ノ</sup>清光流<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>尽<sup>キ</sup>

D 曉風吹<sup>ナキ</sup>上<sup>ス</sup>巖<sup>クワツ</sup>公<sup>ノ</sup>船

岩頭<sup>(2)</sup>為渡子之事、見于前。

〔欄外注〕

家法詩、昨日東風欺不在、就床吹落読残書。

〔傍注〕

B<sup>(4)</sup>一理清平。

C<sup>(5)</sup>長時無間。

〔出典〕

未詳。

〔校異〕

\* 州―洲    \* 俊―俊    \* 州―洲    \* 虚堂之下無之―瑞後改俊    \* 黏―粘

〔略註鈔〕

東州瑞藏主

(189) 月江  
号也。

『江湖風月集略註』研究(十五)(飯塚・佐藤・比留間・堀川)

A 長天黏<sup>レ</sup>水々粘<sup>レ</sup>天<sup>ニ</sup>

天ガ水ニ映ジ、水ガ天ニ映シテ、秋水長天俱一色ノ心ゾ。

長天ハ月ノ字ヲ作り、秋水ハ江ノ字ヲ作タゾ。

B 一片<sup>マ</sup>水輪上下円<sup>ナリ</sup>

水輪ハ月ナリ。今夜一輪光、清光何<sup>レ</sup>処ト一意也。一

理齊平也。又上無<sup>レ</sup>攀仰、下絶<sup>レ</sup>己躬<sup>ヲ</sup>ノ心ゾ。

C 千里<sup>ノ</sup>清光流<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>尽<sup>キ</sup>

氷ハ流<sup>レ</sup>トモ、月ハ流ヌゾ。

D 曉風吹<sup>キ</sup>上<sup>ス</sup>蘼公<sup>ノ</sup>船

コラヘヌ月ヲ、曉風ガ蘼公ノ船ニ吹キ上セタゾ。岩頭

ハ渡子ト成テヲリヤルニ依テ、江ノ辺ノ月チヤ、ホト

ニ蘼公ノ船ト云ナリ。千里ノ清光ハ月也。流不<sup>レ</sup>尽トハ、

江々ノ字ナリ。曉風吹上スハ月。蘼公ノ船ハ江ノ字ナリ。

吹上ストハ、曉風ノ吹ク時分、月ノ船上ニアルハ、吹

上セタ如クゾ。

【注（189）】

（1）嗣虚堂……無之。東州瑞の伝記は未詳。『訓解添足』に「虚堂に

嗣ぐ。正誤宗派三に載す東洲惟俊と別なり」と見え、さらに「天台

万年。統翠、天台万寿寺に作る」と『夾山抄』の説を引き、これに

注して「万年に住するは惟俊なり。瑞には非ず。万年東洲、惟俊共に

虚堂に嗣ぐ」とする。寛永本は瑞を後に俊に改めたとして、この

両者を同一人と見ている。なお京大本と同じく州に作るものは五山

版、『略註鈔』、『襟帶集』、『竜門文庫本』であり、寛永本と同じく

洲に作るものは『夾山抄』、『訓解添足』、『啓蒙抄』である。

（2）岩頭……見于前。本詩は巖頭全蘼が漢江で渡子となり度生為人

していた故事を踏まえたもの、という注。『0033送人帰沔水』、

『0150秋江』に既出。

（3）家法詩……読残書。『三體詩』増注本卷一・絶句所収の薛能（晚

唐）作「老圃堂」に「邵平瓜地接吾廬、穀雨乾時偶自鋤、昨日春風

欺不在、就床吹落読残書」（京大本の「東」を「春」に作る）と見え

る。老農の晴耕雨読の日々、留守の部屋に置いていた読みかけの本を

春風が吹き落としたという内容だが、月江詩と意味上の関連はなく、

D句「曉風吹上」と表現上の類似を注したものの。

（4）一理清平。B句は一つの円い月が天にあり（上）、また水にも映

じてあり（下）という光景を詠むもの。この水輪。月を、一つの理

により二辺に偏らず齊しく平等である道理と注するもの。一理齊平

とも。注（7）参照。

(5) 長時無間ⅡCの句意、千里を行く江の流れに、いつまでも月影が宿り続けるという光景を、間断なく永劫にと注するもの。長時無間の用例は『碧巖録』九十則(大正蔵四八・二四c)、同九十四則(同・二一七b)等に見える。

(6) 天ガ水ニ……作タゾⅡA句の意を、天と水、転じて主と客が渾然としてすべてが一体になっているところを言うとする。またこれを月・江の二字に分ち解釈するもの。「秋水長天俱一色」は、王勃『滕王閣序』に見える「秋水共長天一色」を踏まえたもの(俱の字は写誤か)。「大慧録」卷三(大正蔵四七・八二四a)「秋水共長天一色」、「宏智録」卷一(大正蔵四八・一一c)(いずれも「秋水共長天一色」)等禪録にも引かれる。粘(黏)は、連なる・つぐの意。

また長天粘水に類似的の用例に、白玉蟾「贈方壺高士」に「浩浩神風碧無涯、長空粘水三千里」(『修真十書玉隆集』卷三十二)と見える。

(7) 水輪ハ……ノ心ソⅡB句の取意。一輪の月が天に耀き水に映じている。この光が届かぬところはどこにもない。すべてがこの道理一つである、と注する。さらに、この上に仏なく下に己れなし、と注するもの。「虚堂録」卷八の上堂語「卓主丈、此夜一輪滿、清光何処無」(大正蔵四七・一〇五一b)を踏まえる。「上無攀仰、下絶己躬」を『禪語辞典』は、すがるべき聖者をも拒否し。おのれの聖性をも払い捨てるの意と説明する。「碧巖録」十七則(大正蔵四八・二五七c)、『明覚録』卷一(大正蔵四七・六七四a)他、禪録

に引かれる。

(8) 水ハ……流ヌゾⅡ詩句「清光」は注(7)の『虚堂録』の語を踏まえる。「竜門文庫本」、『襟帯集』にも同様の注が見える。C句の解釈について、『啓蒙抄』は「今夜一輪滿、清光何処無ト云タル羊二、江流千里モ清光ナリ。何ニト江カ流レテモ月光ハ流レ尽キスナリ」と注している。また『訓解添足』は「水流千里、月影之ニ和シテ流レ、亦千里也。水流尽キズ、月光モ亦尽キズ」「或ハ、水ハ流レ去ルト雖モ月ハ尽キズ、ト云ハ卑キ説也」と注している。「略註鈔」が「月ハ流ヌゾ」と言うのは、水面に映じた月影ではなく、天上の月のことである。

(9) コラヘヌ……如クゾⅡ「コラヘヌ月」は清光放つ月を感嘆している言葉。『時代別国語大辞典 室町時代篇』に「こらへぬ」の言い方で、対象のすばらしさに思わず感嘆する気持ちをおさえることができない意を表す」とある。本詩が詠じているのは、天上に輝く月、水面に映るその月影、その二つの間に浮かぶ巖頭の船という光景か。とすれば、『略註鈔』のD句注は、船の上空に輝く月は、まるで明け方の風が水面の月影を天へと吹き上げたようだと注するもの。巖頭渡子の故事は、迷いの此岸からさとの彼岸へと渡すことを言うものだが、これを踏まえて、水面の月Ⅱ此岸、天上の月Ⅱ彼岸、曉風Ⅱ巖頭の為人度生のはたらきに擬して詠んだものか。

0190 淨頭

【京大本略註】

(190) 淨頭

亦云、持淨。

A 触<sup>ニ</sup>辺<sup>ニ</sup>明<sup>レ</sup>淨<sup>ラ</sup>々<sup>ニ</sup>明<sup>ラム</sup>触<sup>ラ</sup>

B 一種<sup>ノ</sup>工夫<sup>ナド</sup>貴<sup>フ</sup>背<sup>コウ</sup>人<sup>シ</sup>一<sup>ヲ</sup>

C 苕<sup>シヤウ</sup>帚<sup>ウ</sup>用<sup>テ</sup>来<sup>テ</sup>随<sup>レ</sup>日<sup>ニ</sup>禿<sup>フ</sup>

D 塵埃<sup>ジンアイ</sup>難<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>簸箕<sup>ハシ</sup>唇

触者、不淨也。簸箕者、取塵之器也。

或云、苕帚用來者、触与淨共掃除之義也。

分触淨不相投、唵恨魯陀耶娑婆訶、个是入門頭、一籌。

〔欄外注〕  
在西曰西淨、東<sup>ハ</sup>東司。

【傍注】

A 淨穢<sup>（五）</sup>一致也。

B 此淨頭也。

C 「禿」用得。

【出典】

未詳。

【校異】

\*帚——帚    \*娑——婆    \*訶——詞

【略註鈔】

(190) 浄頭

大事ノ職也。頭ノ字ハ物ヲ司ルヲ云也。東ニアルヲ東  
司ト云イ、西ニアル、西浄ト云トナリ。サモアルカ。

A 触<sup>レ</sup>辺<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>淨<sup>ラ</sup>々<sup>ム</sup>明<sup>ラ</sup>觸<sup>ラ</sup>

西浄ニ触落ノ牌カアルゾ。不浄カ付タトキハ触ノ方ヲ  
掛ケ、木履ナトノ落タトキハ落ノ方ヲ掛ルソ。即<sup>レ</sup>触<sup>ニ</sup>  
明<sup>レ</sup>淨、即<sup>レ</sup>淨明<sup>レ</sup>觸<sup>タ</sup>ゾ。ムサイ処ヲモムサイト思ハズ  
シテ、踏ミ籠ンテ掃地セズンバ、淨クハナルマジキゾ。  
トキ、淨ニ触カアリ、触ニ淨ガアルソ。

B 一種ノ工夫貴<sup>レ</sup>肯人<sup>ヲ</sup>

觸<sup>7</sup>淨一種ト心得テ、肯フ人ガ少レナゾ。

C 苕<sup>ヲ</sup>帚<sup>ヲ</sup>用<sup>テ</sup>來<sup>テ</sup>隨<sup>レ</sup>日<sup>ニ</sup>禿<sup>ッ</sup>

帚ヲ日ニ用タニ依テ、尽ク禿レタソ。

D 塵埃難<sup>シ</sup>上<sup>セ</sup>簾<sup>ヲ</sup>簾<sup>ヲ</sup>唇<sup>ヲ</sup>

簾箕ハ、ミノコトゾ。唇ハ、ハシノ心ゾ。帚<sup>(8)</sup>ノ禿ル、  
ホト掃除シタホトニ、塵埃ノ簾箕ニ上スルモ無イソ。  
又<sup>(9)</sup>帚モ禿レタホトニ、塵埃モ箕ニ上セ難イトモ見ヤウ  
ケレトモ、夫レハヨハイゾ。觸<sup>10</sup>淨ノ二ツ苕<sup>ヲ</sup>帚<sup>ヲ</sup>トモニ放  
下シタトキ、簾箕ニ上セフズ塵埃ハ無イゾ。無功用<sup>ノ</sup>地  
也。

【注 (190)】

(1) 触者不浄也。A句の「触」は、不浄のことである。

(2) 簾箕者取塵之器也。D句の「簾箕」は、塵を取る道具のことである。まず、偈の中の語の、文字どおりの語義を記す。

(3) 或云……掃除之義也。C句の「苕帚用來」は、触（けがれた状態）も浄（清らかな状態）とともに掃除する、という意である、とする。

(4) 道竺三持浄偈。道竺三持は竺三持妙道。『増集統伝灯録』卷五に「育王横川珙法嗣」として「台州紫籙竺三持道禪師」の章がある（統藏一四二・四一八b）が、『訓解添足』が「此持浄偈不載」とするよう

に、この偈が何に拠るのか未詳。また『訓解添足』は、三句目について「此三句一字多、蓋婆娑詞之三、訛婆娑二字乎」とする。『勅修百丈清規』卷六に「入厠（庵根魯陀耶婆訶）」（大正藏四八・一四五c）とあり、「婆」は削るほうがよい。三句目は厠に入るときに唱える言葉。偈の大意は「ここ（厠）は何の場所なのか。触と浄とを分けたとんに、厠には入れなくなる。厠に入る言葉を唱えるのは、入門の第一歩である」ということか。

(5) 浄穢一致也。清らかな状態もけがれた状態も、一つのものである。

(6) 西浄……触ニ浄ガアルソ。『勅修百丈清規』卷四、浄頭に「稍有狼籍、隨即浄治」（大正藏四八・一三三a）とあり、『禪林象器箋』卷二四、触落牌はこれに注して「解者曰、厠有触落牌。若有狼藉自不洗之、則挂牌報浄頭令洗浄焉。或曰、牌一面書触字、一面書落字。

触是不淨義、落是遺落義。若有不淨穢汚、則挂触牌而報淨頭。若鞋履等落廁内、則挂落牌而告淨頭也」とする。『略註鈔』の記述は「或曰」以下に近い。廁には「触」と「落」の二つの牌がある。汚物が付いたときは「触」の牌を掛けて浄頭に洗う作業をさせ、履き物などを落としたときは「落」の牌を掛けて浄頭に拾う作業をさせる。触があつて浄が明らかになり、浄があつて触が明らかになる。汚い所を汚いと思わずに踏みこんで掃除しないと、きれいにはならない。このように考えると、触と浄は一つのものである、とする。

(7) 触浄一種ト……少レナゾ 触と浄は一つのもとの理解できる人

0191 天衣生縁

【京大本略註】

(191) 天衣、生縁

天衣<sup>①</sup>、温州樂清県人也。林間録云、天衣懷禪師說法於淮山。三易法席、學者追崇、道蹟著矣。然猶未敢通<sup>②</sup>名字<sup>③</sup>于雪竇。々々已奇之。僧有誦<sup>④</sup>其語<sup>⑤</sup>、至<sup>⑥</sup>曰<sup>⑦</sup>譬如<sup>⑧</sup>雁<sup>⑨</sup>過<sup>⑩</sup>長空<sup>⑪</sup>、影沈<sup>⑫</sup>寒水<sup>⑬</sup>、雁<sup>⑭</sup>無遺蹤之意、水<sup>⑮</sup>無<sup>⑯</sup>沈影之心<sup>⑰</sup>、因搏<sup>⑱</sup>髀<sup>⑲</sup>嘆息、即遣人慰之。懷乃敢<sup>⑳</sup>一通<sup>㉑</sup>狀、問<sup>㉒</sup>起居<sup>㉓</sup>而已云々。

A 長空ノ雁影沈ム寒水ニ

B 老去病深無奈何<sup>①</sup>  
トモスルコト

C 土肉不<sup>②</sup>医<sup>③</sup>山骨瘦<sup>④</sup>  
ス

D 鶴峰溪上夕陽多<sup>⑤</sup>  
シ

第一句、見于題注。僧宝伝云、懷清癯、行步遲緩、衆中見<sup>①</sup>如鶴在鷄群。時有言法華者、不測人也。行市井、拊<sup>②</sup>懷背<sup>③</sup>曰、臨濟德山去<sup>④</sup>。懷初未<sup>⑤</sup>喻、問耆宿。々々曰、汝其当宏<sup>⑥</sup>禪宗<sup>⑦</sup>乎、行<sup>⑧</sup>矣、勿滯于此、云々。東遊至翠峰、々々衆盛。懷当

は少ない(から珍重すべきである)。  
(8) 箒ノ禿ル、ホト……無イソ 箒がつぶれるほど掃除したので、ちりとりに載せるちりが無い、とD句を解する。  
(9) 又箒モ……ヨハイゾ 箒をつぶれてしまったので、ちりをちりとりに掃き取れない、という意に取るのは弱い、とする。  
(10) 触浄ノ二ツ……無功用ノ地也 触と浄の二分法をほうきとともに捨てたならば、ちりとりに載せるちりはなくなり、人為的な功用を廢する境地に達することができる。



管炊、自汲澗、折擔悟旨。顯公印可<sup>シテ</sup>以為<sup>レ</sup>奇。辭去久無<sup>レ</sup>耗。有僧自淮上來曰、懷出世鉄仏矣。顯使誦提倡之語、曰譬如雁過<sup>ニ</sup>云々。顯激賞<sup>シテ</sup>以為<sup>レ</sup>類<sup>ニ</sup>己、云々。自鉄仏至天衣、五遷<sup>ニ</sup>法席<sup>一</sup>（會元作七坐道場、化行海內）。土肉者、土底三尺之下、謂之土肉也。山骨<sup>一</sup>者、言孤危峭峻、而無寸土貌、以喻天衣瘦容。樂清県有雁山四十九盤、故曰山骨。又天衣有駕鶴峰駕鶴溪、言夕陽影中、鶴峰之面目露堂々也。又樂清県有白鶴寺、是王子晋吹簫上仙之地也。或云、天衣老倒病深、故作雁過長空等之語話也。僧宝伝云、五遷<sup>ニ</sup>法席<sup>一</sup>、皆荒涼<sup>ノ</sup>処、晚以<sup>レ</sup>疾居<sup>ニ</sup>池州杉山庵<sup>一</sup>。門弟子智才住<sup>ニ</sup>杭州仏日山<sup>一</sup>、迎歸養待劑藥。才如<sup>ニ</sup>姑蘇<sup>一</sup>未還。懷促其歸、至門而懷已別<sup>レ</sup>衆云々。偈曰、紅日照扶桑、寒雲封華岳、三更過鉄圀、拶<sup>ニ</sup>折驪龍角<sup>一</sup>。會元。

〔欄外注〕

天衣章、會元十六（住揚州鉄仏寺上堂ノ語ニ）、雁過長空者、住揚州鉄仏時之語也。

抄云、雁山四十九盤在樂清県、故道山骨瘦、以吟天衣瘦容也。

第三句、或抄云、土肉山骨、以言、將謂天衣孤高峭峻、面無和氣、元來鶴峰依然夕陽多、是懷禪師真面目也。

<sup>10</sup>石林、天衣生縁頌云、一錯路頭滄海隅、寒潮幾度落平蕪、當時坐得爺船穩、冲本秀夫籃外魚。貞和<sup>一</sup>。

〔傍注〕

B 杉山庵ニテ病悩之体也。

C 孤老峭峻也。「山骨」石ハカリノ山也。

D 天衣生縁ノ地ニ白鶴山アリ。

【出典】

未詳。

【校異】

\*云々―云云天衣章會元十六雁過長空者住揚州鉄仏時之語也

\*過云々―過長空云云

\*云々―云云

\*山骨―山骨

瘦鶴峰溪上夕陽多 \*云―曰 \*婦養侍―婦々養待 \*而―劑、\*云々―云云

【略註鈔】

(191) 天衣生緣

A長空<sup>レ</sup>雁影沈<sup>レ</sup>塞水<sup>ニ</sup>

是ハ、天衣懷ノイマタ見解ヲ師ニ呈セヌトキノ說法ノ語ヲ、其ノ俣ライタゾ。雪竇此說法ヲ聞テ、奇特ヂヤト思ワレタゾ。爰テハ便チ天衣ノ処ヲ雁ノ無心ナニ譬ヘタソ。勝定國師ノ天衣懷ノ頌ニ、誰知<sup>ル</sup>父子不伝<sup>フ</sup>妙、寒雁影沈秋<sup>キ</sup>一江、ト作ラレタソ。

B老去<sup>テ</sup>病深<sup>シ</sup>無奈何<sup>モスル</sup>

天衣ハ、池州ノ杉山庵ニ、老病テ引籠ンテヲリヤルヲ、其弟子知才、出世シテ我処ヘ移シ取テ、養イ殺シタソ。<sup>温</sup>叙中モ、天衣ノ如ク老病テ居ラレタヲ、弟子居頂ガ養イ殺シタソ。山庵ト号ソ。山庵雜錄ナト、云モ、天衣ヲ慕<sup>フ</sup>テ付ケラレタゾ。天衣老病テ、何ニトモシ難イソ。

C土肉不<sup>レ</sup>医<sup>セ</sup>山骨瘦<sup>ス</sup>

天衣ノ老病テ瘦セラレタハ、山骨ノ瘦タ如クゾ。土肉ハ土ノコトゾ。山ノ瘦セタハ、土肉デモ医治セヌソ。

D鶴峰溪上夕陽多<sup>シ</sup>

天衣ノ瘦セラレタハ、鶴峰ヲ夕陽ノ時分ニ見ルヤウナソ。老倒ノ時分ナホトニ、夕陽ニ比シタゾ。鶴峰モ天衣ニアル

ソ。又、天衣ノ貌カ鶴ニ似タ、ト云コトガ注ニモアルホトニ、緣語ソ。

【注(191)】

(1) 天衣……人也。『五灯会元』卷十六・天衣義懷章に「永嘉樂清陳氏子也」(統藏一三八・三三八a)、『禪林僧宝伝』卷十一・天衣懷章に「禪師名義懷、生陳氏。温州樂清人也」(統藏一三七・二四五a)とあり、後者に拠ったか。

(2) 林間録……而已云々。『林間録』卷上、天衣の逸話を載せる部分の前半をそのまま引用する(統藏一四八・二四七a)。後に嗣法することになる雪竇に早くもその境地を認められたという逸話で、『略註鈔』では「其語」を利用した表現であるA句の注で説明されている。

(3) 僧宝伝……行海内。『禪林僧宝伝』卷十一、注(1)に同じ部分。漁師の家に生まれ、殺生をよしとせず、長じて都に出て、景德寺(當時の都開封にあつたか)で得度した、という記述に続くもの。瘦せてゆっくり歩く姿は鶏の群れに混じった鶴のようだったこと、言法華という不思議な僧から「臨濟德山せよ」と言われたこと、「云々」部分は二人の禪師に参禅したがうまくいかず、という記述がある)、雪竇に参じ、自炊しながら修行し、印可を受けること、招かれて鉄仏寺住持となったこと(鉄仏寺は『五灯会元』卷十六・法秀円通章の「無為軍鉄仏寺懷禪師法席之盛」(統藏一三八・三〇八d)という記述に従えば、無為軍すなわち現在の安徽省合肥市の寺)、そこでの説法の語(これがA句に利用されている)を伝え聞いた雪竇が自分と同類だと激賞したこと(「云々」部分は、雪竇の慰問に対して

門人の礼を取り、その礼式の知識に皆感歎したこと)、鉄仏から越州(現在浙江省紹興)の天衣寺に移るなど、五度住寺を変えたこと、を述べる。末尾の記述については、『五灯会元』卷十六、注(1)と同じ部分には確かに「後七坐道場、化行海内」とあるが、欄外注「天衣章」云々に、この語が揚州鉄仏寺でのものだとするのは、むしろ『僧宝伝』の記述に拠るものであり、同書だと場所が特定できないし、寺の所在が揚州というのも根拠がない。ちなみに、『建中靖国統灯録』卷五・天衣山義懷章では「後住鉄仏・投子・相林・広教・景德・杉山・天衣・薦福、道化盛行」(統藏一三六・四四d)とあり、杉山が退隱後のものとすれば、それを除いてまさに七カ所となる。

(4) 土肉者……瘦容。『東坡先生詩』卷五「仏日山榮長老方丈五絶」その三に「東麓雲根露角牙、細泉幽咽走金沙、不堪土肉埋山骨、未放蒼龍浴渥洼」とあり、注に「石鼎聯句云、巧匠斲山骨、今不堪土肉」と引用されている。『四河入海』卷五ノ二、当該詩の一韓智翹の注には「土肉ハ土也。山骨ハ石也。土肉カ石ヲ埋ライヤカリテ」とあり、三尺下云々という説明はない。東坡詩は山を人間の肉体の比喩で描いているが、ここはその表現をもう一度人間そのものに対して用い、天衣の瘦せた姿を、傍注Cに言うのとおり、岩肌が露わで土が全くない様に喩えたもの。類似の表現に『貞和集』卷十、介石智明「病起」の「通身是病通身葉、病去依前葉自除、木落秋空山骨露、何須一默对文殊」がある。この場合は落葉によって山骨が露わ

になったとするもの。

（5）樂清県……山骨『方輿勝覽』卷九・浙東路・瑞安府に「丹芳嶺（一名四十九盤。自此入雁山境）」とあり、同書雁蕩山・南雁蕩の項に、険しい山谷である旨の記述がある。盤はつづら折りの道の意。故郷樂清県の名山に天衣の姿を擬えたとするもの。欄外注「抄云」云々もこの説。

（6）又天衣……露堂々也『別の説で、住持だった天衣山に擬えたとするもの。』方輿勝覽』卷六・浙東路紹興府に「天衣寺」はあるが、駕鶴峰・駕鶴溪は不明。そもそも題が「生縁」（生誕地）なので、この説は成り立たない。なお、D句「夕陽多」を、夕陽に照らされてその姿がはつきりと見えている、と取るが、欄外注「第三句」云々は、姿からして厳しい禅風かと思っていたら、夕陽のように本来は温かな性格だった、と夕陽を比喩だとする説。

（7）又樂清県……地也『また別の説で、天衣を仙人の王子晋に擬えたとするもの。白鶴寺ではなく白鶴山は傍注Dに言うのとおり『方輿勝覽』卷九にあり、王羲之が文君を訪ねて見失ったとの逸話と、李建中のその逸話を踏まえた詩を載せる。詩には「玉簫峰下」云々とあって、王子晋を連想させるが、本来その故事の舞台は洛陽近くの緱氏山。なお、白鶴峰ならば、蘇軾ゆかりの地として同書卷三十六・広東路・惠州にも載る。

（8）或云天……語話也『A句のもととなった語を、晩年の老病の時のものである説を挙げるが、これは注（3）のとおり『僧宝伝』の

記述と食い違う。

（9）僧宝伝……会元『五度寺を移ったが、皆荒廃した所だった（この後「懷至必幻出樓觀、四事成就」『荒廢した伽藍を再建し寺院生活安定させた、が略されている。晩年は病氣のため池州（現在の安徽省池州市）杉山庵に住んだが、弟子の智才が仏日寺に迎えて世話をした。ところが智才が蘇州に出かけていると、天衣がすぐに帰れと知らせてくる、帰ってみると臨終であつたという。』僧宝伝』はそのあと「才問、卵塔已畢、如何是畢竟事。懷豎拳示之、遂倒臥、推枕而化。閏世七十二、坐四十六夏。葬仏日。崇寧中」とあるのみ、遺偈は、弟子たちに何か言葉を、と智才に促されて述べた、として『会元』に載せる。偈は「東の扶桑を日の出が照らし、華山は冬の雲に覆われている。夜中に鉄閉山に出かけていき、黒龍の角をへし折ってくる」、自らの生涯を回想したものか、遍參遊方を怠るなどの教えか。

（10）石林……貞和『貞和集』卷三、石林行輩の同題の偈を参考として掲げる。そのまま漁夫であればよいものを、道を間違えて禅僧になってしまい、逃がしてやった魚のごとく、慧林若冲・慧林宗本・法雲法秀・長芦応夫らを世に送り出した、というもの。『五家正宗贊』卷四・天衣懷禪師に「住平江薦福、接冲本秀夫。後榜方丈、曰烹金爐。」（続藏一三五・四九〇b）とあり『五家正宗贊抄』に「謂之天衣四哲」とする。なお冲本秀夫については「0053烹金爐」の注8および「0151烹金爐」の注11に既出。

(11) 是ハ……作ラレタソ〓注(3)にあるように、実際は印可の後の語だから状況説明にやや誤りがある。勝定国師〓絶海中津の偈は『絶海録』真讀に「天衣懷禪師」として「高樹雲門五代幘、従他人議葛藤椿、誰知父子不伝妙、寒雁影沈秋一江」(大正藏八〇・七五五b)とあるもので、第四句にこの語の表現を用いる。この項、ほぼ『襟帯集』と一致。

(12) 天衣ハ……シ難イソ〓「養イ殺ス」は死ぬまで面倒を見ること。『日本国語大辞典』第二版では『好色万金丹』(一六九四年)の用例のみを挙げるので、本例のほうが早い、さらに溯って「竜門文庫本」に「我所へ、ウツシ、マイシテ、養イ、コロシタソ」とある。『時代別国語大辞典』は立項せず。後半は恕中無慍と同様の例として示

す。『山庵雜録』は太白山に退隱の後、法姪敬中普莊の求めに応じて記した叢林内外の逸話集で、弟子の玄極居頂が洪武二十三年(一三九〇)に刊行した。日本では古活字版・寛永版で流布。自序には、日本に招請されたが多病のため果たせなかったと述べているが、居頂が面倒を見たこと、天衣を慕った命名であることは見えない。この項全体もほぼ『襟帯集』と同内容。

(13) 天衣ノ……縁語ソ〓晩年のことなので夕陽に喩えた(正確には、夕陽に照らされた山に喩えた)とし、また鶏群中の鶴という伝記中の記述から、鶴が縁語であるとする、この二点は『略註』「竜門文庫本」『襟帯集』にはないもの。

0192 梅岩

# 【京大本略註】

(五二) 四明一関ノ溥首座

諱得溥、嗣観物初、住大慈。溥、怖古切、大也、遍也、普也。<sup>\*</sup>続伝灯、大歇謙之嗣也。

(192) 梅岩

号。這梅者、專言笑、亦古意也。

A 臨<sup>レ</sup>機<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>箇<sup>ノ</sup>百<sup>ノ</sup>雜<sup>ノ</sup>碎<sup>ト</sup>

B 三十六<sup>ノ</sup>牙<sup>ノ</sup>渾<sup>ニ</sup>帶<sup>ニ</sup>酸<sup>ニ</sup>

C 不<sup>レ</sup>立<sup>ニ</sup>孤<sup>ニ</sup>危<sup>ニ</sup>峰<sup>ノ</sup>峭<sup>ニ</sup>

D 斷崖無<sup>レ</sup>路<sup>ニ</sup>雨<sup>ニ</sup>花<sup>ニ</sup>寒<sup>シ</sup>

龐居士訪大梅常問曰、久嚮大梅、未審、梅子熟也未。常云、你向何処下口。士云、百雜碎。師展兩手云、還我核子來。翠岩芝云、此二人大似把手上高山。松源岳頌云、大梅々子熟、龐老已先知、正眼驗深要、相逢拍手歸。大梅山者、漢梅福、字子真、知三王莽必篡漢祚、一朝棄妻子入山、學術登仙之地也。三十六牙者、是人之好相也。仏四十牙也。雨花者、須菩提在巖中宴坐、天帝釈雨花、云々。

〔欄外注〕

山庵雜錄、寂照老人、為儒生、題古昔十賢詠梅詩図云、詩之召南、書之說命、孔子昔所刪定也。皆言其実、而不及其花。由梁何遜、至唐宋十君子者、誦說命、習孔子之業者也。形諸詠歌、述諸章句。皆言其花、而不及其実。噫、世道不古、人心益薄、且偽其不敦、本也。例皆如是。

魏武帝、行失道、三軍皆渴。帝令曰、前有大梅林饒子、甘酸以解渴。士卒聞之、口皆水出。

谷、消梅詩、北客未嘗眉自顰、南人誇說齒生津。

大梅常初參、馬祖問、如何是仏。祖云、即心即仏。常言下大悟。直入大梅山而居云々。

〔傍注〕

C句 垂手還同万仞崖。

〔出典〕

未詳。

〔校異〕

\*得—徳 \*也—也宗派図物初之下人也 \*嚮—響

〔略註鈔〕

（五一）四明一関溥首座

（192）梅岩

号也。

# A 臨機道簡百雜碎<sup>一</sup>

此頌ハ、梅ノ実ヲ本ニ作タソ。梅ノ岩チヤホトニ、大梅、  
龐居士ノ問答ヲ以テ作ルソ。此梅ハ、龐居士カ云タヤ  
ウニ、百雜碎シタト云モ、

# B 三十六牙渾帶<sup>二</sup>酸<sup>三</sup>

三十六牙ガ、皆酸カラウゾ。

# C 不立<sup>レ</sup>孤危<sup>ヲ</sup>峰峭<sup>々</sup>

機鋒<sup>機</sup>ヲハ立セネトモ、機鋒ガアルゾ。不立峭峻、而峭  
峻ノ処ガアルゾ。

# D 斷崖無<sup>レ</sup>路雨花寒<sup>シ</sup>

不立孤危而峭峻ナホトニ、依リ着ク者モ無ソ。百鳥モ  
銜<sup>ム</sup>花<sup>ヲ</sup>無<sup>レ</sup>路処ゾ。雨花寒トハ、花モ何モ不<sup>レ</sup>雨処ゾ。  
<sup>(15)</sup>一二ノ句ハ、梅ノ字、三四ハ、岩ノ字ゾ。又、大梅ノ、  
我<sup>ニ</sup>還<sup>シ</sup>核子<sup>ヲ</sup>来<sup>レ</sup>ト、ナルくト云ハレタヤウナガ、峻  
峻ナ処ガアルゾ。学人ノ路頭ヲ絶却シテ、花ガフリ塞  
イタゾ。

## 【注(192)】

(1) 諱得溥嗣観……大歇謙之嗣也。物初大観の法嗣とするのは、『物初語録』の編者として「德溥等 編校」とあることによるか。寛永本は、「宗派図、物初、之下ノ人ナリ也」とある。「溥」の語注は、「重修玉篇」巻十九に見える。『増続伝灯録』巻一には、雪竇大歇謙禪師の法嗣として立伝、頌一首が掲載されている。『訓解添足』は、物初、大歇いずれの法嗣としても、『宗派図』に見えないことを指摘する。

(2) 這梅者專言実亦古意也。この頌で用いられる「梅」は、専ら梅の実の謂で用いられるが、これも古意に基づく。『欄外注』参照。

(3) 龐居士訪大梅……相逢拍手帰。A句の注。『禪林類聚』巻十九に、「大梅常禪師因龐居士問、久響大梅、未審梅子熟也未。師云、你向甚処下口。士云、百雜碎。師云、還我核子来。翠巖芝云、此二人大似把手上高山。松源岳頌云、大梅梅子熟。龐老已先知、正眼驗深要、相逢拍手帰」(統藏一一七・一一五c)とあり、文に異同がある。「龍門文庫本」は、「大光明藏」を引用する。龐居士は大梅の名にかけて、大梅を慕ってきましたが、梅の実は熟しましたかと尋ねると、大梅は、既に熟していると答える。大梅が問う、ところでお前はどこで口にしたのか。居士が言う、すっかりかみ砕いた。大梅は言う、私に核子を返せ。そこで、居士は去った。この話頭は、梅の完熟に擬えて、修行の淳熟、得悟を問題にしている。翠岩、松岳の語は、共に大梅と龐居士との同道唱和の問答と解する。



（4）大梅山者漢梅福……登仙之地也（注（3）に関連して「大梅山」の注。『氏族大全』巻四に、「梅仙（梅福、字子真、九江人。補南昌尉願、一登文石之階、陟丹墀之塗。及王莽專政、一朝棄妻子去、變姓為吳市門卒、人伝以為仙）」と見えるのが典拠か。『古今事文類聚外集』巻十五にも、稍簡略化された記事が見える。

（5）三十六牙者……仏四十牙也（B句の注。「三十六牙」は、人間の好相を言い、「仏四十牙」は、釈尊「三十二相」の一つ、「四十齒相」を言う。因みに常人の永久齒は三十二齒。

（6）雨花者須菩提……帝釈雨花云々（D句の注。「雨花」は、須菩提が岩の洞に坐禪していた時、帝釈天がその徳を讃嘆し、散華したことを言う。梅岩の「岩」のイメージを喚起させる修辭。例えば、『増続伝灯録』巻五、竺原妙道章に、「上堂。虚空無變動之相、日月自上自下、宝鏡無鑑照之心、物象自去自来。須菩提宴坐岩中、帝釈雨花讃嘆。喝一喝（下略）」と見える。

（7）山庵雜錄……例皆如是（『山庵雜錄』巻二に見える一文（続蔵一四八・一七九a）。寂照老人（元叟行端）が、儒生であった時、「古昔十賢詠梅詩図」に題して言う、孔子が刪定した「召南」（『詩経』国風）や「説命」（書経）においては、梅の実が述べられるばかりで、その花について言及されることはなかった、梁の何遜以降、唐宋の十君子は、上記の書を学ぶ儒学の徒でありながら、詩文を製する時、その花ばかりを言い、その実に言及することはない。世道は古とは異なり、人の心は薄徳となり、且つ偽ってその本来に基づこうとし

ない、の意。

（8）魏武帝行失道……口皆水出（魏の武帝（曹操）は、行軍中道に迷い、全軍が渇きに苦しんだ。曹操は、この先到大梅林があり、実が沢山なっている、甘酸っぱい梅の実で渇きをいやせと命令した。兵士はこれ聞いて、口に唾を溢れさせた、の意。『山谷詩集注』巻十一「戲答晁深道乞消梅二首（その二）」の注に、「北客未嘗眉目顰、南人誇説齒生津、（筆談載沈存中茶論詩云、誰把嫩香名雀舌、定知北客未曾嘗。按唐独孤及有招北客文。世説曰、南人學問如鴈中見日顰眉、謂梅酸使人顰眉也。世説又載、魏武帝行失道、三軍皆渴。帝令曰、前有大梅林饒子、甘酸可以解渴。士卒聞之、口皆水出）」とあるのが、参考になる。

（9）谷消梅詩……説齒生津（注（8）参照。

（10）大梅當初參……山而居云々（『無門関』第三十則「馬祖因大梅問、如何是仏。祖云、即心是仏」（大正蔵四八・二九六c）と見えるほか、『馬祖語録』巻一に「大梅山法常禪師、初參祖。問、如何是仏。祖云、即心是仏。常即大悟。後居大梅山」（続蔵一一九・四〇七c）とある。完全に一致する典拠は未詳。

（11）垂手還同万仞崖（やさしげに手を差し伸べて学人を導くように見えるが、いざ参てみると切り立った万仞の崖のように峻峻な機鋒があることを言う。

（12）此梅ハ龐居……皆酸カラウヅ（龐居士が百雜碎と答えた時、大梅ノ梅子をかみ砕いて満口の齒牙が酸味をおびた、の意。『襟帯集』



も、「臨——百雜碎ト云タハ、已下<sup>シテ</sup>ロ<sup>ク</sup>クラウハ、三十六牙ハ、皆酸ハアルマイカ」と注する。

(13) 機鋒ヲハ立セ……処ガアルゾ〓大梅法常が「私に核子を返せ」と答えたのは、後文に言うように「ナルナルト」答えたように見えるが、そこには鋭い機鋒があり、人を寄せ付けない厳しさがある、の意。『襟帯集』に、「不立峭峻而峭峻、平易ノ処、在峭巍々之処ノ」と見えるのが参考になる。「龍門文庫本」も同様である。

(14) 不立孤危而……何モ不雨処ゾ〓臨済の喝、徳山の棒のような激しい機関（手段）を用いるわけではないが、大梅、龐居士は、表は平々としていて、内に宿す機鋒は鋭いので、修行者は近づくすべもない。百鳥すらも花を手向けようにも近づきようがないほどだ、だ

0193了庵

【京大本略註】

(五二) 三山<sup>ミヤ</sup>敬叟<sup>シヤウ</sup>、莊和尚

(193) 了庵<sup>リョウアン</sup>号。

A 糸毫<sup>シコウ</sup>淨<sup>ジュウ</sup>尽<sup>シテ</sup>不<sup>ツ</sup>立<sup>モス</sup>レ<sup>セ</sup>

B 一撃<sup>イツ</sup>元<sup>ゲン</sup>無<sup>ム</sup>眼<sup>ガン</sup>裏<sup>リ</sup>ノ沙<sup>シャ</sup>

C 昨夜<sup>サヤ</sup>風<sup>カゼ</sup>敲<sup>カク</sup>門<sup>モン</sup>外<sup>ガイ</sup>ノ竹<sup>チク</sup>

D 也<sup>ヤ</sup>知<sup>チ</sup>賊<sup>ゾク</sup>ノ不<sup>フ</sup>レ<sup>レ</sup>コ<sup>コ</sup>ト<sup>ト</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>打<sup>ウ</sup>タセザル貧家<sup>ヒンカ</sup>

抄<sup>セウ</sup>曰<sup>イハレ</sup>、賊者六根之賊也。外塵已尽、内塵亦無。了々々時、無復可了也。

から、どんなに徳が高く、それを讃嘆しようと思っても、花も何も降らすことなどできない、の意。梅岩その人もこのような人物であつたか。三者を托上する。

(15) 一二ノ句ハ……岩ノ字ゾ〓梅岩の号を、A B句で「梅」を、C D句で「岩」のイメージを読み込んでいる。

(16) 又大梅ノ……フリ塞イタゾ〓注（14）とは、別の解釈。大梅が私に核子を返せと、あたかも普通に答えたように見えるが、そこには鋭い機鋒がある。学人が参ずる道は完全に閉ざされてしまい、その道は散華の花に塞がれてしまった、の意。ここでは散華の花が降り注ぐ。

【欄外注】

全篇用香巖擊竹事之意。

第一句者、外塵已尽。第二句者、内塵亦無、皆了也。第三四者、了々々時、無後可了也。

【傍注】

C 「門」庵也。

D 「貧家」庵也。

【出典】

未詳。

【校異】

\*号―ナシ \*了々々時無後可了也―ナシ

【略註鈔】

三山敬叟莊和尚

(193) 了庵

号也。

A 糸毫淨<sup>シテ</sup>尽<sup>一</sup>不<sup>モ</sup>立<sup>レ</sup>セ

糸毫<sup>7</sup>ホトノコトマデ尽シテ、ムサラシイ道理ハ一ツモ

無イ。又<sup>8</sup>一ト云ラ一ツ立テ、其、一ヲモ立セヌトモ見

ヤウゾ。易ニ先天之一後天之一ト云コトガアルゾ。先

天ノ一ヲハ非一ト云イ、後天ノ一ヲハ一之上ト云ゾ。

仏祖以前ハ一ノ一也。仏祖ノ出興ハ一ノ一也。

B 一撃<sup>9</sup>元無<sup>シト</sup>眼裏<sup>ノ</sup>沙<sup>一</sup>

香巖ノ一撃、忘所知ノ眼底ニ沙ハ無イゾ、トキ糸毫淨

尽シタコトソ。

C 昨夜風敲<sup>ク</sup>門外<sup>ノ</sup>竹

門外<sup>10</sup>ノ竹ヲ、終夜風ガ敲クヲ賊<sup>ト</sup>ヂヤカト思フタ、アレ

トモ、

D 也<sup>ア</sup>知<sup>ル</sup>賊<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>打<sup>セ</sup>貧家<sup>ヲ</sup>

ヨモヤヌス人デハアルマイト知タソ。ナセナレハ糸毫

浄尽<sup>シテ</sup> 徹底貧家チャホトニソ。内塵ガ収タニ依テ、外塵モ起ヌソ。無心無念ニナラネハ、六根ヨリ六賊ガ入ルソ。一二ノ句ハ了々ト作り、三四ハ庵々ト作ルソ。

【注(193)】

(1) 三山敬叟莊和尚<sup>ニ</sup>伝および嗣法未詳。爰は叟の異体字。京大本と同じく爰と作るものは『首書』に見え、五山版「竜門文庫本」『襟帯集』・「夾山抄」・「啓蒙抄」は叟に作る。

(2) 抄曰……可了也<sup>ニ</sup>ある抄の注を引く。D句の賊とは眼耳鼻舌身意の六根、煩惱のを起こすものになるもの。六賊ともいう。外界の塵(六境)が尽きれば、内側の塵(六識)もまた無くなる。了は煩惱のもとなるものを無くし尽くすことをいうのであろう。詩意を、すべて了じ尽くしたところと解するもの。

(3) 全篇……事之意<sup>ニ</sup>香巖撃竹とは、湧山靈祐より与えられた未生已前の一句の問いを考えていた香巖智閑が、磬が竹に撃ち当たった音を聞いて大悟した公案のこと。『湧山録』(大正蔵四七・五八〇b)、『五灯会元』卷九「香巖智閑」章(統蔵一三八・一六四a)等に見える。「0129香巖撃竹」注(3)参照。この公案が詩全体の意味に関わるという注。だが『訓解添足』はこの解釈を非なりとする。

(4) 第一句……可了也<sup>ニ</sup>(3)にはほ同じだが、四つの句それぞれに意味を配している注。

(5) 庵也<sup>ニ</sup>庵の縁語としての門という注。

(6) 庵也<sup>ニ</sup>庵の縁語しての貧家という注。

(7) 糸毫ホト……無イ<sup>ニ</sup>ごく微細なところまで(煩惱のもとを)浄尽したので見苦しいところはひとつもない、とA句を解する。「むさらし」は、「対象が秩序を欠き、見るものに不快感・嫌悪感を催

させるさま」（『時代別国語辞典・室町時代篇』）

（8）又一ト……一ノ一也〓ここに引かれる易に言及する文章の典拠は未詳。類似の用例には『九皇新経註解』（呂洞賓撰、八・九世紀の人、八仙の一人）巻上に、「一氣循環、一理流行」という句に対して「此一氣在未開未闢、為先天之一。氣在既開既闢、為後天之一」と注する文章が見える。また『易経』には「先天而天弗違、後天而奉天時（天に先立ちて天違たがわず、天に後れて天時を奉ず）」と見える。A句の一を注して、世界の開闢に先立つところとして「一ヲモ立セヌ」と言うものか。仏祖の出興前後にもこれを敷衍しているが具体的な内容は未詳。

（9）香巖ノ……シタコトソ〓「一撃忘所知」とは香巖撃竹話の中で、香巖が師・瀉山に対して述べた頌に登場する語。『瀉山録』に「一撃忘所知、更不仮修時。動容揚古路、不墮悄然機。處處無蹤跡、声色外威儀。諸方達道者、咸言上上機。師聞得、謂仰山云、此子徹也」

## 0194 人之汚水

### 【京大本略註】

（194）人之汚水ニ

勝覽七卷、汚州有汚水。

A 小朶峰前絆草鞋ニ

B 歳公帆掛待君来ヲ

C 風休水面平レ如鏡

（大正蔵四七・五八〇b）と見える。この香巖のように大悟徹底した者であれば眼中の塵はない。そこが糸毫淨尽したところという、と注したもの。眼裏沙について、『碧巖録』二十五則頌に「眼裏塵沙耳裏土」（大正蔵四八・一六六b）と見える。なお五山版は裏を底に作る。

（10）門外ノ……入ルソ〓貧家・徹底して内側がおさまった（煩惱が尽きた）状態、賊・外側から入り込もうとする煩惱と注して、CD句の意を解するもの。「賊不打貧家」については、『景德伝灯録』巻十「湖南祇林和尚」章に「僧問、十二年前為什麼降魔。師曰、賊不打貧兒家。曰、十二年後為什麼不降魔。師曰、賊不打貧兒家」（大正蔵五一・二八〇b）、『碧巖録』三十三則本則著語（大正蔵四八・二七二a）等と見える。『禪語辞典』には「古くは、賊不打五女之門という諺があつた」と指摘する。

D 下<sup>2</sup>却<sup>ス・セヨ</sup>江頭過渡<sup>かド</sup>牌<sup>ラ</sup>

小朵峰者、靈隱前飛來峰也。注在上。過渡牌者、岩頭值会昌沙汰、而後於鄂渚湖邊、作渡子。兩岸各掛一牌板、有人過渡、打板一下。師云、阿誰。或云、要<sup>レ</sup>過<sup>ヨント</sup>那邊<sup>ニ</sup>。師自芦葦間、舞棹迎之。一日因一婆子、抱一孩兒來乃問、呈<sup>モテ</sup>機<sup>ハナ</sup>舞棹即不問、且道、婆子手中兒、甚處得來。頭以橈便打。婆云、婆生七子、六箇不遇知音。只這一箇也不消得。便拋向水中。又或掛禁渡牌。有風雨時掛此牌、示此渡惡處故。

〔欄外注〕

或義云、此行亦無風起浪、為甚什麼。且留且祝之。

禁渡牌、亦曰之風牌。江水洶湧風作之時、掛牌禁渡。

鄂渚湖、在漢陽軍在、勝覽廿八。

〔傍注〕

A 奈此境。

C 見事境界。

〔平如鏡〕<sup>7</sup>非洪波浩渺白浪滔天之活境界。  
D 言句<sup>8</sup>三昧無用也。

〔出典〕

未詳。

〔校異〕

\* 七—二十七 \* 沔州有沔水—隋改為沔州以沔水為名漢陽軍在之漢水注云自襄陽以下在晉時皆名沔水又六十九卷利州路有沔州沔水與漢陽軍沔水異境界 \* 機—橈<sup>(前カ)</sup>

【略註鈔】

(194) 人之<sup>レ</sup>汚水<sup>ニ</sup>

岩頭ノ渡子ト作テ居タ処ソ。夫<sup>レ</sup>ニ依テ岩頭ノコトヲ作ルゾ。

A 小朶峰前絆<sup>フ</sup>草鞋<sup>ヲ</sup>

小朶峰ハ靈隱ニアルソ。靈隱ヨリ草鞋ヲ絆テ汚水ヘ行クゾ。

B 歳公帆掛待<sup>テ</sup>君来<sup>ガ来</sup>ヲ

岩頭<sup>イ</sup>ノ船ニ帆ヲ掛テ、ソチガ来タラハ渡サフズト云テ待タレフゾ。岩頭ノ今マ活キテハ居ラレネトモ、汚水ヘ行クホトニ、如<sup>レ</sup>此云ソ。アレトモ、

C 風休<sup>テ</sup>水面平<sup>ナリ</sup>如<sup>コト</sup>鏡<sup>モ</sup>

是レホト風モ休ミ水面モ平カナニ、過渡ノ牌ヲ掛テ人ヲ渡シコトモ入ヌコトソ。ホトニ、

D 下<sup>ニ</sup>却<sup>セヨ</sup>江頭過渡牌<sup>ヲ</sup>

トナリ。底意<sup>イ</sup>ハ、此人行脚シテ汚水ヘ行クハ、無<sup>キ</sup>風起<sup>シ</sup>波<sup>ヲ</sup>タコトソ。汚水テモ岩頭ノ如ク濟渡セフト思ワフソ。生得風波モ無ク、ナンノ為ニシヤウコトモ無イニ、過渡牌ヲモ下却セイデハ。又<sup>イ</sup>風ノ休ンタトキハ、過渡ノ牌ヲ掛テ人ヲ渡シ、風ノ荒イトキハ、禁渡ノ牌ヲ掛テ人ヲ渡サヌゾ。今風モ休タホトニ、過渡ノ牌ヲ掛テ人ヲ渡サフズガ、洪波浩渺白浪滔天ノ処ヲ渡ライデハ。

ホトニ、過渡牌ヲ下却セヨトナリ。

【注(194)】

(1) 勝覽七卷「洧水」の記述が『方輿勝覽』にあることを示す注。校異に示したように「二十七卷」とする寛永版本が正しい。その「漢陽軍」の「建置沿革」に、「禹貢荊州之域……隋改爲沔州以沔水爲名」とあり、「漢水」の項には「自襄陽以下在晉時皆名沔水」とある。寛永版本では、卷六十九の「利州路」にも沔州・沔水があるが、この偈の舞台である漢陽軍のそれとは別であることも指摘している。

(2) 小朶峰者……注在上「A句の「小朶峰者」は、靈隱寺門前の飛來峰のことである。「注在上」は、直接には「0012靈隱聽猿」のC句に飛來峰の語が既出であることを指す。「沔水」で渡し守をした「巖公（＝岩頭）」の故事は「0033送人婦沔水」、「0150秋江」で既出。

(3) 過渡牌者……便拋向水中「D句の「過渡牌」に関わる「巖公（＝岩頭）」の故事を説明した注。この話は『聯灯会要』卷二十一、「五灯会元」巻七、『碧巖錄』五十一則などに見られるが、『禪林類聚』卷九には「巖頭禪師、因沙汰後、於鄂渚湖邊、作渡子。兩岸各掛一牌板、有人過渡、打板一下。師云、阿誰。或云、要過那邊。師乃舞棹迎之。一日因一婆子、<sup>拘方</sup>拘一孩兒來乃問、呈桡舞棹即不問、且道、婆手中兒、甚處得來。師以桡便打。婆子云、婆生七子、六箇不遇知音。只這一箇也不消得。便拋向水中」（統藏一・一七・五九a）とあり、「鄂渚湖」という地名が見える。「沙汰」は会昌の法難（八四三～四）のことで、このとき岩頭全藏（八二八～八八七）は鄂渚湖の渡し守

に身をやつし、兩岸に一枚の牌板を掛け、対岸に渡ることを望んでそれを叩く人がいると応じた。「一日」以下の「一婆子との問答は、偈の解釈には関わらないようである。

(4) 又或掛禁渡牌……示此渡惡趣故「禁渡牌」の説明が何に拠るかは未詳。『夾山抄』には「或掛禁渡牌、風雨時絶過客往来、蓋以惡灘也」という同趣旨の説明がある。『訓解添足』は、「禁渡牌」の注として出典を示さないまま「又云、風牌。江水風作時、掛牌禁渡也」とする。欄外注「禁渡牌」以下の記述はこれに近い。『略註鈔』にも「風ノ荒イトキハ、禁渡ノ牌ヲ掛テ人ヲ渡サズ」とある。

(5) 或義云……且祝之「この偈を贈られた人が沔水へ行つたのは、風のない所に波を起こすようなもので、行く必要はなかった。「且留且祝之」は、留まれと言う一方で、それほどの境地に達した人の旅立ちを祝つてもいる、の意か。

(6) 鄂渚湖在漢陽軍在勝覽廿八「注(1)」で示したとおり、『方輿勝覽』に「漢陽軍」の記述があるのは卷二十七。しかし鄂渚湖の記述はここにはなく、卷二十八「鄂州」の「郡名」に「鄂渚」が見える。

(7) 非洪波浩渺白浪滔天之活境界「浩渺」は広々とはるかなさま、「滔天」は天に届くほど勢いが強いさま。「洪波浩渺白浪滔天」の八字で大海の波浪が天に達するような雄大なさまを言い、禪籍には頻出する（『碧巖錄』十八則、著語など）。風がなく水面が穏やかな状態は、このような「活境界」と異なる、より高い境地であるという意。

（8）言句三昧無用也。『過渡牌』を下ろす理由は、対岸に渡すことに喩えられる言葉による接化が無用だからである、という意か。

（9）岩頭ノ船ニ……如此云ソ。『過渡牌』を下ろす理由は、岩頭（を氣どつたお節介）が、おまえを船に乗せよう（『接化しよう』）と待っているだろう。岩頭は同時代人ではないが、岩頭ゆかりの沓水に行くのでこのように言つた、という意。

（10）底意ハ……下却セイデハ。『過渡牌』の真意を述べた部分。この偈を贈られた人が、沓水へ行つたのは、風のない所に波を起こすようなものである。岩頭を真似て沓水で渡し守をする（『接化する』）つもり

なのだろうが、人はもともと悟つていて、風波に喩えられる煩惱もなく、教え導くことは何もないのだから、『過渡牌』は下ろすのがよい。注（8）の指摘に近い。

（11）又風ノ……下却セヨトナリ。『過渡牌』を下ろす別の理由を述べた部分。風が止まれば渡し、風が荒ければ渡さないのがこの渡し場の決まりなので、今、風が止まつたので渡そうとするのだが、風が吹いて波が大きいときに渡さなければ意味がない（『煩惱の中にあつて悟りから遠い人を導かなければ意味がない』）。だから水面が穏やかなときには『過渡牌』を下ろせ、という意。

## 0195 松窓術士

### 【京大本略註】

（五三）四明間極雲和尚

虎<sup>①</sup>\* 丘閑極法雲、嗣虚堂。又住越之東山。

（95）松窓術士

松窓者、術士之道号\*。

A 濤<sup>トウ</sup>声細々月生寒<sup>ツ</sup>

B 六<sup>ロク</sup>戸虚凝<sup>キョウ</sup>夜未<sup>ニテ</sup>闌<sup>ナラ</sup>

C 撥<sup>ハツ</sup>転<sup>テン</sup>卦盤<sup>ケイバン</sup>重<sup>ジュウ</sup>点過<sup>テヨ</sup>

D 子<sup>シ</sup>宮<sup>キョウ</sup>却在<sup>ハテ</sup>午宮<sup>ニ</sup>看<sup>ミ</sup>

此頌、始二句題松窓也。卦盤者、卜吉凶六十四卦盤也。子宮却<sup>①</sup>\*者、昼夜相応之謂也。星曆<sup>シヤウリヤク</sup>図云、子位蟹宮、太陰精也。午位蝸宮、太陽精也。子宮者北斗、午宮者南斗也。又午宮者、奎宿也。毎日於午時出南方。見于千手経。子宮与



午宮間、隔九千万里云。<sup>\*</sup>抄、不<sup>三</sup>必引<sup>三</sup>天文星曆、只以向南看北斗<sup>二</sup>之語、可見之也。宮者、十二宮也。

【欄外注】

抄云、午宮之名奎宿、便千手觀音応化也。毎日於午時、出於南辺、此時誦千手呪五反。乃千手経一宿五反之說是也。

【傍注】

A 松也。

B 窓也。

【出典】

未詳。

【校異】

\*虎―虚    \*号―号也    \*―――在午宮看    \*之―ナシ    \*方―方也    \*万―ナシ

【略註鈔】

(五三) 四明閑極雲和尚

(195) 松窓術士

松窓ハ、術者ノ道号歟、或ハ軒号歟、未知。

A 濤声細々月生<sup>ス</sup>寒<sup>ツ</sup>

濤声ハ松ノ声ガ濤ニ似タゾ。松風カ吹テ寒イニ、月カ

出タゾ。

B 六戸虚凝夜未<sup>ナラ</sup>闌

六戸ハ六窓也。六根門頭也。虚凝ハ静カナ底ゾ。六戸

モ静リ切テ、夜モ十分ニハ深ヌソ。一二ハ松窓ヲ作ルナリ。

C 掇<sup>テ</sup>転<sup>シ</sup>卦盤ヲ重<sup>テ</sup>点過<sup>セヨ</sup>

D 子宮却<sup>テ</sup>在<sup>レ</sup>午宮ニ看<sup>ル</sup>

卦盤ヲ取テノケ、六十四卦ヲ打返シテ見レハ、皆相違スルゾ。子宮ハ夜半ノ星シ、午宮ハ午日ノ星ゾ。夜ルカ昼ルニナリ、昼ルカ夜ルニナツタソ。向<sup>テ</sup>南ニ看<sup>レ</sup>北斗ヲ一意也処コソ、本分ノ術士ヨ。生仏一如ノ処ゾ。

## 【注（195）】

（1）虎丘閑極……越之東山『続伝灯録』巻五に、虚堂智愚の法嗣として「蘇州虎丘閑極雲禪師」が載る（続蔵一四二・四二二a）が、上堂語のみで伝記なし。『山庵雜録』巻上には「為虚堂上首弟子、有高行。住虎丘而終」（続蔵一四八・一六三b）ともある。なお、虚堂の行状は閑極によるもので、「住持慶元府清涼禪寺嗣法小師法雲」の署名がある（『虚堂和尚語録』巻十、大正蔵四七・一〇六四b）。『越之東山』は紹興南方の雲門山（雲門寺）のこと。伝記については、佐藤秀孝「虚堂智愚の嗣法門人について——南宋末元初の江南禅林における虚堂門下の動向——」（駒澤大学仏教学部研究紀要）六四、二〇〇六・三に日本伝存の墨蹟類を含め資料が博搜されており、一二一五年生、一四世紀末頃の寂、雲門に住したことについては、本書以外に『明極禪師語録』の建長語録に「東山閑極老叔」とあるのを見出されている。ちなみに、明極は松源——無得——虚舟——虎岩——明極、閑極は松源——運庵——虚堂——閑極と次第し、明極から見えて一世代上になるので「叔」なのだろう。

（2）此頌……松窓也『傍注および「略註鈔」にも言うように、A句は松を吹く風を波濤の音に喩えることに基づいて「松」を、B句は六根（五感および意識）を外界に対する「戸」——「窓」に喩えることに基づいて「窓」をそれぞれ詠んでいる、とするもの。この二字を用いずその意味を表現するのは道号頌の常套なので、逆にこのような理解に基づいて、「松窓」は術士の道号である（『略註鈔』は、

もしくは軒号かと保留）という題注が出てくるのであろう。

（3）卦盤……卦盤也『卦盤』とは、六十四卦の占いを行う盤のことである、という説明で、同様の説明は「〇〇七六秤命術者」の注（2）にあり、B句に「卦盤撥転」と類似表現がある。

（4）子宮……十二宮也『D句の解釈。昼（午）に夜（子）を見る、の意とする。この記述、典拠を見出しがたい。『訓解添足』が引く『事林広記』甲集巻一「十二宮分野所属図」だと「子」は宝瓶、「午」は獅子、逆に羊（白羊）は戌、蝎（天蝎）は卯に属していて、一致しない。仏教では密教関係書に蟹宮・蝎宮の名が見えたたとえば『宿曜経』の記述に基づく杲宝『大日経疏演奥鈔』に「第一宮、星四足張四足翼一足、太陽位焉。日天子居焉。其神如師子、故名師子宮」「第二宮、氏一足房四足心四足、熒惑位焉。其神如蝎、故名蝎宮」「第三宮、井一足鬼四足柳四足。太陰位焉。月天子居焉。其神如蟹、故名蟹宮」（大正蔵五九・五四四b c）とあり、蟹＝太陰は一致するが、蝎と太陽は結びつかない。「抄」に言うように、単に南北を示すだけで、星座まで問題にしていまいか。「向南看北斗」は「向」のかわりに「望」「面」にも作る慣用句（『碧巖録』二十八則頌は「面」で、北にある北斗を南に向いて見ようとするときでもない見当違い、あるいは逆に、自由自在な境地をも言う。「竜門文庫本」では彭叔自身の説として、易の「坎ハ北方也、離ハ南方也。然則、子宮ハ坎宮也、午宮ハ離宮也」と、C句からのつながりで易の説卦に基づいた解釈を示している。また、『襟帯集』では五位説に基づく解釈も

詳細に述べられる。

(5) 抄云……之說是也。〓注(4)にも見える、奎宿を千手観音に宛てる説。『襟帯集』にも「又、午宿奎宿也。千手観音本宿也」以下、同様の記述があるが、出典を明らかに出来ない。『千手千眼観世音菩薩薩大広大円満無礙大悲心陀羅尼經』(千手經)に「亦応専念我本師阿弥陀如来、然後即当誦此陀羅尼神呪。一宿誦滿五遍、除滅身中百千万億劫生死重罪」(大正藏二・一〇七a)とあって、これが「一宿五反之説」に当たるものであるうが、頼瑠『薄草紙口訣』には「一宿五反者、故僧正説云、誦此陀羅尼一度誦五反云事也」(大正藏七九二・一八c)や、宿〓誠あるいは一心という説が挙がっているが、二十八宿に宛てる説はない。この經典中の陀羅尼(大悲呪)は禪宗で頻用するものであるが、そこでの伝承でもなさそうである。

## 0196 賀南山侍者

### 【京大本略註】

(1%) 賀<sup>ニ</sup>南山ノ侍者<sup>ヲ</sup>

南山者、浄慈寺之山<sup>曰イニ\*</sup>号南屏山也。故南山是浄慈寺也。

A 大王来也主礼<sup>レイ</sup>薄<sup>シ</sup>

B 万福声ノ中客意長<sup>シ</sup>

C 仏口蛇心俱<sup>ニ</sup>捉敗<sup>ス</sup>

D 六橋ノ煙雨鎖<sup>トキス水コヲ</sup>垂楊<sup>ヲ</sup>

趙州<sup>②</sup>一日坐次、侍者報曰、大王来也。趙州鞠躬<sup>シテ</sup>曰、大王万福。者云、未到和尚(古本<sup>ニハ</sup>未到在<sup>ト</sup>アリ)。師云、又道<sup>ヲ</sup>来

(6) 卦盤ヲ……相違スルゾ〓「0076 秤命術者」の注(2)にあるように「掇転」の解釈が定まらない(使わずにしまうのか、使い終わってしまうのか)が、ここは使ってみてもなかなか占いが一つに決まらないで迷っている、の意か。

(7) 子宮ハ……ノ処ゾ〓注(4)と同様、子・午を時刻と捉える説。六十四卦のような事象の分析的な捉え方を超越し、すべてを一体のものとして捉えられてこそ術士としての本来のあり方が備わったもので、それは仏と衆生とが一体のものであることと同じ境地だ、とするもの。前半二句の道号に基づく表現が、術士の高い境地を暗示するとすれば、後半部分のこの解釈とつながってくるが、明確ではない。

也。<sup>③</sup>侍者<sup>⑤</sup>罔措。主礼<sup>③</sup>薄者、此時（古本作侍）者敬<sup>レ</sup>主之礼薄也。客意長、貶侍者、褒趙州也。仏口<sup>④</sup>——言邪正一齊掃蕩也。六橋煙——抄云、謂這侍者骨格風采也。六橋在淨慈寺前西湖之上也。

〔欄外注〕

<sup>⑥</sup>六橋在蘇公堤、子由所撰、東坡先生墓誌、杭州西湖、南北三十里、環湖往来、終日不達、既去葑田、々々如雲、乃積之湖中、為長堤、一以通南北、六橋則湖上所創之橋也。按先生作堤疏云、跨流為橋者凡六、蓋今蘇公堤上之六橋也。

【出典】

未詳。但し、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』卷第五「侍者・禪客附」に「天童請客」として見える。

【校異】

\*号——号曰    \*時——侍    \*長——長    \*仏口——仏口蛇心俱捉敗    \*六橋煙——六橋煙雨鎖垂楊    \*六橋——六橋者

【略註鈔】

（19c）賀<sup>①</sup>南山<sup>②</sup>侍者<sup>③</sup>

淨慈ノ侍者ナリ。

A 大王来也主礼薄<sup>④</sup>

趙州ニ、侍者ガ大王来也ト云タレハ、趙州ハ、大王万福トラシナツタゾ。万福ハ、日本デ目出度イト云心ゾ。イマタ山門ノ辺マデヲリヤツテ、爰ヘハヲリヤラヌホトニ、侍者未<sup>⑤</sup>到在ト云タソ。趙州云、亦道<sup>⑥</sup>来也ト。サキニ来<sup>⑦</sup>タト云タガ、ナセニ未到トハ云ソ。侍者ハ、只アノ大王ノコトヲト斗リ思フタゾ。主礼薄トハ、

主ガ賓ヲ礼スル事ガ薄イゾ。又、侍者、客ヲ報スルコト斗ヲ知テ、主人ヲ礼スルコトカ薄イトモ見ルゾ。主人是<sup>⑧</sup>レ什麼ゾ。

B 万福声ノ中客意長<sup>⑨</sup>

趙州ノ、万福大王トラシナツタハ、客ヲ待スル意ガ長イゾ。一二ノ句ニ、侍者ノ故事ヲ作ルゾ。

C 仏口蛇心俱捉敗<sup>⑩</sup>

侍者ノ、大王来也ト云タハ、仏口デ、イカニモ正直ナゾ。趙州ノ、万福トラシナツタハ、蛇心デ、正直ニモ無イゾ。又、趙州ノ、万福大王トラシナツタハ、上ハ仏口ノヤ

ウナレトモ、底ハ蛇心ゾ。這個ヲ含シタホトニゾ。此  
南山ノ侍者ハ、仏口・蛇心トモニ、ジツト捉敗シタゾ。

#### D 六橋ノ煙雨鎖<sup>ス</sup>垂楊<sup>ヲ</sup>

捉敗シヤウハ、六橋ノ辺ノ煙雨カ、垂楊ヲ鎖シタ如クゾ。  
把住ゾ。注ニ、橋ーート云ヲ、侍者ノ骨格風彩チャト  
シタカ、鎖スト云字ヲ以テ見レハ、初メノ説カヨイゾ。  
又、六橋ーート云現成迄チャ。仏口ー、捉敗シタ処ハ、  
只現成本分迄チャ。

#### 【注(196)】

(1) 南山者……是淨慈寺也。南山が淨慈寺を指すことについては、  
「0111政黄牛」参照。「扶桑五山記」大宋国諸寺位次に「第四杭州臨安府南山淨慈報恩光孝禪寺」とあり、境致に「南屏山或云南屏峯、慧月山(『和漢五山志』では「慧日山」)、南高峰、六和塔後山、枯木堂僧堂、宗鏡堂法堂、六橋、西湖、千峯閣、羅漢堂、正偏知閣、霜花巖」を挙げる。

(2) 趙州一日坐次、……侍者罔措。AB句の典拠。「略註鈔」に、「侍者ノ故事ヲ作ルゾ」とあり、南山侍者を祝賀するテーマに縁由する。「龍門文庫本」は、「禪林類聚」卷九「侍者」に見える、「趙州諗禪師、因侍者報云、大王来也。師云、万福大王。者云、未到在。師云、又道来也。侍者罔措」(統藏一三六・二六五b)を典拠としてあげるが、文字に異同がある。「趙州一日坐次」の句を有するのは『碧岩録』「第九則・本則評唱」(大正藏四八・四九c)であり、「趙州鞠躬曰」の類似句を有するのは『聯灯会要』卷六(統藏一三六・二六五b)である。

(3) 主礼薄者……褒趙州也。AB句の注。侍者が大王が来ましたと趙州に告げた時、侍者は、主を崇敬する礼儀を欠いている。「主」が誰なのかは、『略註鈔』では問題となる。趙州は、身をかめ畏まって、「大王ごきげんうるわしう」と言ったのは、賓客を待遇する深慮を藏する。A句において、侍者を抑下し、B句において趙州を托上するという褒貶のあることを指摘する。

(4) 仏口……一斉掃蕩也。C句の注。C句は、邪正の見解もろともに掃滅している、の意。仏口と蛇心とを同時に掃い尽すことを言うか。「仏口」「蛇心」については、注(8) 参照

(5) 六橋煙……西湖之上也。D句の注。「或抄」にD句は、南山侍者の外貌眈眈を言うとする。『略註鈔』『訓解添足』は、この解釈を否定する。「六橋」については、「0111政黄牛」参照。

(6) 六橋在子由……上之六橋也。『六橋』補注。「蘇公堤」関する注。蘇子由（蘇轍）撰述「東坡先生墓誌銘」を引用する。また、『東坡先生詩集注』巻十一「軾在潁州與趙德麟同治西湖未成改揚州三月十六日湖成德麟有詩見懷次韻」詩「六橋橫絶天漢上、北山始與南屏通」の注に、「次公曰子由先生墓誌、杭州西湖、南北三十里、環湖往来、終日不達、先生既去葑田、葑田如雲、乃積之湖中、為長堤、一以通南北。六橋則湖上所創之橋也。甄曰、按先生作堤疏、跨流為橋者凡六、並在今蘓公堤上」と見える。或いはこれに拠るか。

(7) 趙州二侍者……主人は何ぞ。趙州は、侍者が大王がいらつしゃいましたと告げた時、仁義道中に従い、大王のいいますが如く「大王万福」と仰った。未だ大王は山門辺にあつて、趙州の居る場所に到着していないので、侍者は「ここには到着していません」と言った。趙州は、先程は大王来たれりと言ひ、今はどうして到着していないと言ふのかと詰問する。文面からは、明確にし得ないが、主人公は誰なのかと言うことが、問題となつていふと思われる。侍者は、大王という権力者を「主」と認識しており、その先入観に縛られてい

る。「主礼薄」とは主人として賓客を遇する礼儀を欠いている、の意。又一説に、侍者が客（大王）来訪を告げることだけを理解して、主人（趙州）と対峙することを疎かにしているの意か。趙州は、一度は侍者に寄り添つて、気づきを持ったが、とんと侍者は気付く気配もない。おまえという主人公は、賓客（大王、或いは趙州）をどのように遇するのか。主人公とは、一体何だ、の意。

(8) 侍者ノ大王……捉敗シタゾ。侍者が大王がいらつしゃいましてと言つたのは、「仏口」であり、誠に正直な物言いである。趙州が「万福」と言つたのは、「蛇心」であり、内に含むところのある物言いである、の意。別の説としては、「万福大王」と言つたのは、表面的には「仏口」（素直な心の発露）であるが、底には一筋縄では行かない思いを含んでいる。なぜなら、這個（一）大事因縁・悟道が内在するからだ。南山侍者は、趙州の処にいた侍者とは異なり、「仏口」「蛇心」をしっかりと捉えている、の意か。

(9) 捉敗シヤウハ、……説カヨイゾ。南山侍者の、「仏口」「蛇心」の捉え方は、六橋に烟る雨が蘇公堤に植えられた楊柳を包み込むようなものだ、の意。把住、しっかりとした理解の在り方だ。或注に、「南山侍者の外貌」としているが、「鎖」に字からすれば、先に挙げた説の方が良い、の意。

(10) 又六橋……本分迄チャ。更に、別の解釈としては、「六橋」の句は、南山（浄慈寺）の情景であり、現成（ありのまま）だけのことだ。南山侍者が「仏口」「蛇心」を捉えた境界は、「現成

本分」のそれである、の意。